関西外大通信
THE GAIDAI
Kansai Gaidai
KANSAI GAIDAI UNIVERSITY
KANSAI GAIDAI COLLEGE
July 20, 2010　No. 249

多彩なFD 着実に進展

公開授業 活発

大学改革の柱として組織的な取り組みが義務化されて3年目となるFD（Faculty Development）。その一環で、教員の資質向上と魅力ある授業を目指して本学が進める「公開授業」は、春学期だけで中宮、穂谷両キャンパスで計129クラスに達した。昨年度（年間145クラス）を超えるのは確実。授業研究なども行われ、多彩な手法によりFDは着実に進展している。

春学期の公開授業は6月の4週間をかけて行われた。教員が別の教員の授業を参観しながら向上の手立てを探ろうと、穂谷キャンパスでは、16日の国際言語学部・日木くるみ教授の「キャリアデザインⅠ」に原田三壽准教授が訪れた。1年生が小グループで事前に調べてきた出版やポータル・検索サービスなどの業界の現状を発表。約40人の学生で質疑を交わす様子を見守った。

中宮キャンパスでは、3日の外国語学部のサラ・スキッパー講師の「Integrated English Skills Ⅲ」を澤田治美教授が参観した。2年生約20人が5グループに分かれ「Korean Japanese（在日韓国・朝鮮人）」などと題された学生の短い作文をもとに論議。すべて英語で、この日指名された各グループリーダーが意見をまとめた。

このほか両キャンパスの公開授業では、グループ討論を精力的に進めたり、パソコンを活用し、大きなスクリーンを黒板代わりにして講義の要旨を明確化したりするなど、授業内容を充実させる取り組みが繰り広げられた。

小グループに分かれた学生の間に入り、積極的な発言を促す日木くるみ教授
（後方は原田三壽准教授、穂谷キャンパスで）

授業研究

小谷准教授 発表

第1回FD授業研究は5日、中宮・多目的ホールで開かれた。教職員約40人が出席。外国語学部の小谷克則准教授が学習管理ソフト「Blackboard」の活用法について発表＝写真左＝、論議を交わした。

このソフトは昨年度から必修科目に導入された。パソコンを通して教員と学生の相互コミュニケーションを図り、学習成果を高めるのがねらい。

小谷准教授は、本学ではまだ半数近くが連絡機能を主とするライトユーザーにとどまっていると指摘。1年生向けの基礎的な英語運用能力を育てる授業やTOEIC対策への活用にもふれた。

出席者からは使う文書や写真素材の著作権の問題や一部機能の使い勝手について意見が出された。

ワークショップや講演会も

中宮・多目的ホールでは、7月23日午前10時からBlackboard活用事例発表会が開かれ、桜井悌司教授ら3人が報告。午後1時30分からは第1回ワークショップに移り、戸毛敏美教授と眞鍋昌弘教授が発表する。9月22日午後1時には安岡高志・立命館大教授を迎え、第1回FD講演会も開催される。

授業評価公表
決算と予算も

平成21年度の授業評価がまとまり、中宮、穂谷両キャンパスの学部、短大部の教務委員会が公表した。学生からみた本学の〝授業白書〟であり、今後の授業改善に役立てたいとしている。詳しい資料と分析結果は図書館学術情報センターで公開している。回答数は外国語学部が5万2518件、短大部は2万1723件、国際言語学部は2万6121件だった。

大学の21年度決算、22年度予算も発表された。（10～16面に関連記事）

万代池

外国語学部教授　菊池 繁夫

NHK教育テレビで、日曜日の夕方6時から「ハーバード白熱教室」と題してハーバード大学の人気授業が放映されている。これは教員の講義力というものを勉強するいい機会である。政治哲学者のMichael J. Sandel教授の講義である。大学の劇場でもある大教室は、1階席2階席共に千人近い学生で毎回埋まる▲この講義の面白さは、教授が学生との対話方式で授業を進めていることである。学生たちからも様々な意見が出される。授業というのは、もちろん教員と学生のコラボレーションの上に成立するものなのだが、教員側のみに目を向けても、若い頃からの授業への取り組みの改善努力が必要なのであろう▲私はいつもどなたかの講義や講演を聴く時に、その技量に注目するのだが、本学の国際文化研究所が招聘する世界で第一級の学者達の講義も大いに参考になる。今まで、J. Wellsロンドン大学名誉教授による、発音の傾向調査についての講義、G. Leechランカスター大学名誉教授によるポライトネスの講義、M. Ashbyロンドン大学音声学科主任によるコンピューターの音声解析の講義などに参加したが、こういった方達の講義のうまさには感銘を受け続けて来た▲発声が違う、参加者に語りかけるように話を運ぶ、そして何よりも、その探究してきた内容を身近な例を用いながら展開する。書物とはまた異なる「説明力」を学ぶ機会に我々は囲まれているのである。

Campus Calendar
キャンパスカレンダー

July	7月22日(木)	春学期授業終了
	7月24日(土)、25日(日)	オープンキャンパス
	7月27日(火)～8月4日(水)	春学期末試験
August	8月19日(木)～21日(土)	体育会フレッシュマンキャンプ（中宮）
	8月24日(火)～26日(木)	フレッシュマンキャンプ（穂谷）
	8月28日(土)	オープンキャンパス（穂谷）
September	9月 2日(木)	留学生別科入学式
	9月 2日(木)～ 4日(土)	学生会フレッシュマンキャンプ（中宮）
	9月 8日(水)～10日(金)	文化会フレッシュマンキャンプ（中宮）
	9月18日(土)	3年次編入学試験（9月選考）
	9月18日(土)	大学院9月入学式
	9月18日(土)	学位記授与式（9月期卒業式）
	9月19日(日)	オープンキャンパス
	9月25日(土)	秋学期授業開始
	9月24日(金)、25日(土)	大学院入試（9月選考）
October	10月 9日(土)	保護者就職懇談会
	10月17日(日)	特別入試

中宮キャンパス（大学院・大学・短期大学部）
〒573-1001　大阪府枚方市中宮東之町16-1
TEL. 072(805)2801
穂谷キャンパス（大学）
〒573-0195　大阪府枚方市穂谷1丁目10-1
TEL. 072(858)0021

関西外国語大学
- 大学院 ― 外国語学研究科 ― 英語学専攻博士課程前・後期
- 　　言語文化専攻博士課程前・後期
- 外国語学部 ― 英米語学科
- 　　スペイン語学科
- 留学生別科
- 国際言語学部 ― 国際言語コミュニケーション学科

関西外国語大学短期大学部　英米語学科

関西外大の最新ニュースはホームページにも掲載しています
http://www.kansaigaidai.ac.jp/

第2回オープンキャンパス

「パッション持って頑張れ」

国際言語学部3年 谷村さん激励

今年度第2回目のオープンキャンパスが6月6日、中宮学舎をメーン会場に開かれた。中宮文化博覧祭と同時開催で、高校生ら約850人(前年度550人)が谷本記念講堂でのオープニングのあと、オープンキャンパスのいろんなイベントに参加したり、キャンパス内で店開きした模擬店を見学したりしていた=写真。

本学をDVD紹介のあと、谷本義高学長が設置認可申請中の英語キャリア学部について、「英語のプロフェッショナルを育成します」などと訴えた。

このあと入試部の2011年度入試概要の説明に続いて、5月初めに、アメリカの大学留学から帰国したばかりの国際言語学部国際言語コミュニケーション学科3年の谷村佳子さんが「穂谷キャンパスは、英語圏以外の国への留学の可能性も広がります。目標に向かってパッションを持って、頑張ってください」とメッセージを送り、最後にチアリーダー部パイレーツが元気あふれる演技を披露した。

午後からはネイティブ教員らの体験授業やカリキュラム、留学制度の説明、などがあった。また穂谷学舎への無料バスも運行され、約250人が国際言語学部を見学した。

また同時開催の文化博覧祭では、文化会のクラブなど30近い団体が、日ごろの成果を披露し、混声合唱団「ラベリテ」やフラメンコ部の「アンダハレオ」には大勢の見物客が詰め掛けていた。

文化博覧祭と同時開催

高校生ら850人が模擬店楽しむ

本年度初 穂谷単独開催

雨の中 120人

穂谷学舎単独の今年度初のオープンキャンパスが6月20日に開かれた。時折、雨が降るあいにくの空模様だったが、国際言語学部への進学を希望する受験生ら約120人(前年度140人)が参加し、親しみやすい雰囲気の中で、緑に囲まれたキャンパスでの一日を楽しんだ。

学生が主体になって開催する穂谷のオープンキャンパス=写真=は、今回で7回目。オープニングで大学を紹介するDVDは文化会系クラブ所属の学生自作で、「里山にあるキャンパスは自然が豊かで勉強するには最適な環境。先生方と学生の距離も近く、楽しく勉強できます」とPR。

続いて、国際言語学部のカリキュラム説明や気になる留学、就職なども現役の学生や卒業生らが、それぞれの体験を交えながらポイントを解説した。

このあと各教室で、海外からの招聘(しょうへい)教員の模擬授業を受けたり、中国人留学生から中国の話を聞いたりしていた。

三重県伊勢市から友達二人でやってきた女子高生は「オープンキャンパスは今回で3回目ですが、学生中心の運営は今回が初めて。とても親しみやすく大学が身近に感じられてよかった。外国語に興味があり、留学にもチャレンジしたいので、是非、受験しようと思う」などと話していた。

オープンキャンパス今後の予定

中宮、穂谷学舎合同=7月24(土)、25(日)両日。穂谷学舎へ無料バスを運行。穂谷学舎単独=8月28日(土)。学務課(072-858-0021)へ事前申し込みが必要。

進路指導教諭 入試説明会

「英語のプロフェッショナルを」

近畿2府4県と三重県から123校129人

近畿2府4県と三重県の高校の進路指導担当教諭を対象にした入試説明会が7月9日に、翌10日には、本学出身の小、中、高校教諭が参加した「OB、OG教員のつどい」が中宮学舎で開かれた。文部科学大臣に設置認可申請中の英語キャリア学部の説明と、全学的に力を入れているキャリア教育など本学の特色をPRし、優秀な受験生を確保するのが狙い。

入試説明会には、あいにくの雨の中、123校129人(前年度141校148人)が参加した。本学紹介のDVD上映のあと、まず、トップで登場した谷本義高学長が、英語キャリア学部設置の意義について、最近のグローバル化、国際化の波を受けて、国際舞台で英語を使って働く、職業で実用的に英語を用いる力を付けさせる教育プログラムが必要であるという考えから出発した、などと前置きし、「新学部は、英語を生かした職業に就きたいという学生、生徒の夢をかなえるために必要な英語キャリア基礎力、すなわち英語のプロフェッショナルを養成する学部です」などとアピールした。

また、キャリアセンター所長の森川長俊教授が、キャリアセンターの取り組みについて、「世界経済の減速、長引く不況の影響で、今春の就職率は昨年に比べ10ポイント程度落ち込んでいるが、さらに、体制を強化して学生の夢を実現できるような就職支援サービスを行っている。きめ細かいサービスをするため、新しく、東京、大阪にサテライトの事務所を設置した」と強調した。

最後に、入試部の稲増哲課長が、2011年度の入試概要について詳しく紹介した。このあと、場所を移して個別懇談ブースで、留学の様子や学生生活について担当者が説明=写真。参加した担当教諭のうち17人が、バスで穂谷へ向かい、国際言語学部のある穂谷学舎を見学した。

説明会に参加した奈良県立法隆寺国際高校の担当教諭は「国際英語科や国際教養科を設け、オールイングリッシュの授業も行っており、英語キャリア学部には強い関心を持っている。学校で生徒に詳しく説明しようと思っている」と話していた。

「OB・OGのつどい」には28人

一方、「OB・OGのつどい」には、東海地方などからの参加者を含め28人が出席。谷本学長から英語キャリア学部の説明を受けたあと、キャリアセンター、教職英語教育センター、国際交流部の取り組みを聴いた。

続いて、教職英語教育センター運営委員との情報交換に移り、岡澤潤次教授がここ3年間、中学の英語科の教諭数が、本学出身が全国1位であることを報告。現場の府立高校教諭からは「生徒たちの指導に教職志望の学生を送り込んでほしい」などの要望があり、最後に、厚生南館で旧交を温めた。

PICK UP!!

■四天王寺羽曳丘高、大産大付高と高大連携協定 7、8校目

本学は私立四天王寺羽曳丘高校(大阪府羽曳野市)、大阪産大付属高校(大阪市城東区)と「高大連携協定」を結ぶことになり、5月31日、中宮学舎で協定書に調印した。協定校は大阪信愛女学院高(大阪市城東区)、大谷高(京都市)、比叡山高(大津市)などについで7、8校目。

調印式には本学から谷本義高大学学長、羽曳丘高からは塚原昭應常務理事、山上周校長、大産大付高からは平岡伸一郎校長らが出席した。

協定書には、学習支援プログラムへの生徒の参加、教職員の相互交流などを盛り込んでいる。

■キャンパスビートルズ

地元コミュニティー放送局「エフエムひらかた」に本学が番組提供している「キャンパスビートルズ」を7月から半年間担当するキャスターが決まった。本学FBS放送局の短期大学部1年大崎遥香さん=写真㊧、安賀光さん=同㊨の二人で、毎金曜日午後10時30分から10分間、英語でホットな話題を提供する。

ともに高校時代からの放送部員で音楽好き。大崎さんは「みんなが幸せになれるような番組にしたい」と意気込み、一方の安賀さんは「リスナーに楽しんでもらいたい」と話している。

短大生が異文化体験にチャレンジ

「学短連携」のイベント続々と

本学短期大学部から外国語学部スペイン語学科と国際言語学部へ3年次編入学してもらうためのイベントが相次いで行われた。一つは、7月8日に開かれたスペイン語コースミーティング「フラメンコを踊ろう!」=写真上、もう一つは6月26日のイベント授業「フランス菓子作りに挑戦」=同下。

ステップ、手振りを熱心に「フラメンコを踊ろう!」

短期大学部生にスペイン文化に親しんでもらい、3年次編入学に繋げようと始まった「短大部スペイン語コースミーティング」。7月8日の第3回目は「フラメンコを踊ろう!」、午後6時半から中宮学舎マルチメディアホールにスペイン語を履修している1、2年生約100人が集合、プロのダンサーの指導でステップや手振りに挑戦した。

最初に、スペイン語学科の梶田純子教授が「スペイン文化とフラメンコ」について解説、「フラメンコはスペイン南部のアンダルシアを中心に移り住んだヒターノス(ジプシー)の間で生まれた踊りと歌(カンテ)、ギターが組み合わさった芸術。100回も失恋するような不幸な人ほど踊りがうまくなれる」と話し、緊張を和らげた。

フラメンコを指導したのは、本学短大部出身の福島沙弓さんで、日系ブラジル人のギタリスト Rodrigo さんが伴奏を務め、本学フラメンコ部アンダ・ハレオのメンバー8人もアシスタント役をかってでた。習ったのは2人組で踊る「セビジャーナス」で、福島さんの手本に続いてまずステップを、続いて手振りを加えて踊った。学生たちは「ステップと手の動きを合わせるのが難しかった」と話していた。

最後に福島さんが「本気モード」のフラメンコを披露し、喝采を浴びた。

「メチャおいしい」フランス菓子づくり

短期大学部のフランス語の授業で、今年度からスタートしたイベント授業が6月26日、第4国際交流セミナーハウスで始まった。第1、2回目は、外国語学部ディマルティノ教授夫人のケイカさんを講師に招き、短大生がフランス菓子作りに挑戦した。

ケイカさんは、東京のミシュラン3つ星レストランでフランス菓子作りを学んだあと、結婚式場やケーキ店で修業を積み、一昨年から、京都でお菓子教室を主宰するなどパティシエ歴7年。

授業のタイトルは「フランス菓子とのふれあい~プティ・フール・セックを作ろう」で、計2回で男子学生1人を含む45人が参加した。ケイカさんからレシピの説明を受けながら、手を真っ白にして焼き上げた。

できあがるまでに、お菓子の名前と由来に関係した9つのフランス語の問題にチャレンジ、最後に、コーヒーや紅茶を用意しみんなで試食した。学生らは口々に、「メチャ、おいしい。これなら簡単や」などと感激していた。

イベント授業は昨年度の学短連携検討会議で、楽しみながらフランス語を学び、併せて短大部から国際言語学部へ編入生を呼び込もうと企画した。今後も学期に1回、実施する。

「薬物乱用ゼッタイ、ダメ」

麻薬取締官が本学で講演

学生がからむ薬物事件が相次いでいるため、短期大学部は6月1日、中宮キャンパスの谷本記念講堂で、厚生労働省近畿厚生局麻薬取締部の森脇壽正部長を講師に招き、薬物乱用に関する対策講義を開いた。短大部の新入生約1000人が出席し、講義終了後レポートを提出した。

本学では4月、外国語学部スペイン語学科の男子学生が大麻取締法違反で逮捕されており、これを重視した短大部がK.G.C.ベーシックスの授業として開いた。

森脇部長は「薬物乱用はダメ、ゼッタイ」のタイトルで、スライド画像を使いながら約60分間にわたって講義した。大学生の薬物にからむ検挙数が、2008年で覚せい剤18人、大麻89人に上るという、薬物汚染の低年齢化の実態や健康に対する影響を指摘。世界各国の薬物犯罪に対する取り組みや、薬物犯罪の最高刑が中国、韓国、シンガポール、フィリピン、エジプトなど7か国で死刑、日本、イギリス、フランスの3か国で無期懲役など、各国とも刑罰が厳しいことなどを説明した。

森脇部長は1979年、当時の厚生省に入省。九州地区麻薬取締官事務所(現・九州厚生局麻薬取締部)を皮切りに約30年間、薬物の取り締まり、指導を担当してきた。

スペイン画家アマッ氏が講演

「わが人生アバンギャルド」

国際文化研究所の例会が6月11日、中宮キャンパスで開かれ、スペインの画家、フレデリック・アマッ氏が「わが人生アバンギャルド」と題して講演した。

アマッ氏は1952年にバルセロナで生まれ、舞台美術、映像作家としても活躍している。

この日は、スペインを代表する劇作家・詩人、ガルシア・ロルカ生誕100周年を記念して作られた短編映画「月への旅」(1998年)など、彼の映像作品を上演しながら、スペインのアバンギャルド芸術について語っていただいた。

アマッ氏(右)を田尻教授が紹介

アマッ氏は、シュールレアリズムの脚本をいかに映像化するか。それを実践した映画監督、ルイス・ブニュエルと画家、ダリ脚本の映画「アンダルシアの犬(1929年)」を通して解説。手のひらに蟻の大群や道化、死体といった映像が示すシンボルについて、スペイン語学科の学生ら約50人の参加者と熱い討論を展開した。

(外国語学部教授・田尻陽一)

秋学期のラテンアメリカリレー講義

芸術分野も充実し、9/27から一大学院

公開講座として開かれる大学院「ラテンアメリカ特別研究」リレー講義の日程が決まった。受講希望の学生はK-GENESYSを使って講義日前日の午後5時までに申し込む。1回だけの受講も可能。今年度は、熱心に受講した市民に修了証書を授与する。

博士課程前期・特定履修コース「ラテンアメリカビジネスコミュニケーション」(言語文化専攻)の授業で、9月27日~来年1月24日の月曜日に14回開講。企業や国際機関の専門家、外交官らが中南米のビジネスや魅力を紹介する。

第1回の9月27日は岡本太郎記念館館長の平野暁臣さんが特別講演。また、アルゼンチンが今年独立200周年を迎えるため、駐日大使が講演するほか、11月18日(木)にアルゼンチン・タンゴ・コンサートを開く。今年度は、音楽や美術など芸術分野での中南米との交流をじっくり学べるラインアップとなっている。

PICK UP!!

■ザンビア大使表敬訪問

アフリカ・ザンビア共和国のビクシタ・レワニカ駐日大使=写真㊨=一行が6月22日、本学の谷本榮子理事長を表敬訪問。同国の大学と本学との交流を求めた。

谷本理事長が本学を紹介した後、レワニカ大使があいさつ。「ザンビアには現在、大学は3つあり、新たにひとつが建設中。関西外大との間で教員や学生の交流を図りたい」と提案した。

これに対して、谷本理事長は基本的に賛同し、同国の大学から具体的な申し出を待って検討するとした。

ザンビアはアフリカ南部の内陸国。世界的な銅の産地。1964年に英国から独立。公用語は英語。

■ウィスコンシン大学からも

「『ASEAN+3』大学コンソーシアム構想」のための本学教員FD研修受け入れ先である米ウィスコンシン大学オクレア校のゲイル・スカネック教育学部長とドワイト・ワトソン同副学部長が6月1日、本学を表敬訪問、谷本榮子理事長と懇談した。

本学から昨年度は教員9人が同校に派遣され、今年度も9月に10人が赴く。谷本理事長は「オクレア校からも日本へ教員を送ってほしい」と要請した。

スカネック学部長は「2週間程度の派遣を考えたい」などと答えた。ワトソン副学部長からは教員養成プログラムでの交流を呼びかける発言もあった。

■サラマンカ大学日西センター長講演

6月4日、サラマンカ大学日西文化センター長、オビディ・カルボネイ教授を招き、講演会『奇異なるものの慣用化』が開かれた。カルボネイ教授は翻訳通訳学部の教授でもあり、中宮キャンパス・多目的ルームを会場に、約50人の学生や大学院生の前で1時間半、興味深い翻訳論を展開した。

かつて翻訳といえば、原文を忠実にすべて訳すことが求められた。しかし、東洋と西洋という全く価値観が違う異文化を翻訳する際、自文化のコンテキストに訳語を適合させるわけだが、適合が不可の場合、「削除」と「追加」が必要となる。

また、自文化にないものを同じような意味のコトバに置き換えれば、誤解が生じる可能性がある。とりあえずイタリック体で原語表記をし、その言葉が自文化に定着するのを待つのも一つの手だ。

◇ ◇ ◇

自文化にないものをイタリック体表記にするのか、注をつけるか、説明的描写にするか、参加者を交えて議論となったが、結論をみないまま、講演会は終了した。

(外国語学部教授・田尻陽一)

穂谷のソフトボール部員4人

国体目指し近畿ブロック大会へ

予選会での活躍認められ、大阪府代表に選出

目指せ国体――成年女子大阪ソフトボールチームに、ソフトボール部から4人がエントリーされた。京都府宮津市で行われる国体近畿ブロック大会に優勝すれば、国体出場が決まる。同部員が選ばれるのはこれが始めて。

いずれも国際言語学部で、3年の御輿早貴さん、同横田純美さん、2年村上己月さん、同堺絵梨子さん＝写真右から。

大阪府代表の選手選考を兼ねて5月に開かれた全日本総合女子ソフトボール選手権大会大阪予選会で、本学チームが上位2位までに入った。活躍が目立った御輿さんら4人が成年女子チームの16人に選抜され、ベンチ入りする13人のメンバーにも決まった。

これまでは上位2チームから選考したが、今回は予選会出場の7チームの中から優秀な選手を選出した。史上最強チームの評判も高く、ブロック大会での4人の頑張りが期待されている。

御輿さんはセカンドで広い守備範囲と堅い守りを誇る。横田さんはセンター、村上さんはサードで二人とも足が速く、出塁率が高い。堺さんはキャッチャーで長打力は代表チームでもトップクラス。選ばれるとは思っていなかっただけに、内定通知を受けたときはびっくりしたという。4人は「目標は国体出場。ブロック大会では持っている力を出し切り、ベストの試合をしたい」と張り切っている。

近畿ブロック大会は、8月20日から近畿2府4県の6チームが出場して行われる。昨年は園田女子大チームを中心とした兵庫県が出場権を獲得しており、「打倒兵庫」を目指す。

ソフトボール部の浅野浅春監督（国際言語学部教授）は「4人はスターティングメンバーとして期待されており、持っている力を出し切れば国体出場も夢ではない」と話している。

学歌のCD完成

吹奏楽部と「ラベリテ」が収録

学歌のCDが完成し、学生部に大阪府吹田市のCD制作会社から引き渡された。混声合唱団「ラベリテ」と吹奏楽部がレコーディングし、今後、学内の卒業式、入学式などのイベントのバックグラウンドで流される。

吹込みは5月27日に中宮学舎の谷本記念講堂で行われた。「ラベリテ」と吹奏楽部が参加し、制作会社スタッフの指示を受けながら、8台のマイクに向かって何回も録音した＝写真。

CDはラベリテの合唱と吹奏楽演奏の入ったもの、吹奏楽のみ、合唱のみの3つのバージョンを収録している。これまでのテープの学歌は、ピアノの伴奏で数人が合唱、制作年代も不明という古いもの。テープが伸びて音ずれしているため、新しくCDを制作した。

下宿生は3人に1人

学生部が下宿生調査

下宿している学生は3人強に1人――。中宮学舎・学生部は、6月7日現在で下宿している学生の調査結果をまとめた。それによると、中宮学舎では在籍者9920人に対し3296人が下宿しており、自宅通学に対する下宿生の割合は33・2％、穂谷学舎では3156人に対し1163人で、36・9％となっている。

内訳をみると、中宮の外国語学部英米語学科は、下宿生が2227人（在籍者数6401人）で下宿率は34・8％。スペイン語学科は369人（同1173人）で31・5％、短期大学部は3296人（同9920人）で33・2％。穂谷の国際言語学部は1163人（同3156人）で36・9％となっており、最も高かった。

学年別では穂谷・国際言語学部4年生の41・0％が最も高く、今春の新入生では外国語学部英米語学科の35・9％となっている。

下宿率調査は毎年、実施しているが、公表したのは今回が初めて。学生部では「最近、下宿生がひったくりや性的被害に巻き込まれるケースが多くなっている。教職員の学生指導の参考にしてもらうために公表した」と話している。

また学生向けのマンション管理会社や仲介業者、家主に対しても、「一人暮らしの本学学生に対する注意喚起のお願い」として、戸締りの徹底や不審者の侵入防止策などを訴えたチラシを配布し、下宿先に張ってもらうなどして注意を呼びかけることにしている。

北方工業大の12人

国際言語学部に編入

国際言語学部は、6月10日の教授会で、北方工業大学日本語学部2年生12人（男子1人、女子11人）を3年次に編入学させることを決めた。12人は7月末に北方工業大学の2年次を修了する見込みで、秋学期から穂谷キャンパスで学ぶ。

昨年度には13人が編入学しており、同大学からの編入学生は計25人になる。9月からは別に中国から交換留学生17人、中国語教員インターンシップ生1人を受け入れる予定で、今年4月から継続している科目等履修生9人を合わせると、穂谷の中国人留学生は52人になり、昨年度の31人から大幅に増加する。

スポーツの記録

中宮

ソフトテニス部

■大阪学生大学チーム対抗大会
（5月15、16日、本学他）
▽1回戦
○本　学B　2－1　阪南大
○本　学C　3－0　天理大D
▽2回戦
○本　学A　3－0　大阪学院大A
○本　学B　3－0　大阪府立大
○本　学C　2－0　桃山学院大B
▽3回戦
○本　学A　2－1　奈良大A
○本　学B　2－0　大経大B
●本　学C　0－2　関西大A
▽4回戦
○本　学A　2－1　大体大A
●本　学B　1－2　大経大A
▽準決勝戦
○本　学A　2－1　関西大A
▽決勝戦
○本　学A　2－1　近畿大A
（本学Aは1部リーグ優勝）

男子ハンドボール部

■関西学生春季リーグ戦
（4月10日～5月23日、関西福祉科学大他）
○本　学　23－22　龍谷大
○本　学　41－23　京都工繊大
○本　学　27－23　大阪府立大
○本　学　27－23　滋賀医大
○本　学　36－20　京都府立医大
○本　学　40－24　大阪市立大
（3部リーグ優勝で2部昇格）

男子バスケットボール部

■第60回西日本学生選手権大会
（5月30日～6月6日、大阪府立体育会館）
○本　学　81－72　富士常葉大
○本　学　96－85　久留米大
●本　学　55－106　鹿屋体育大
（3回戦敗退）

女子バレーボール部

■関西大学春季リーグ戦
（4月25日～5月30日、相愛大）
○本　学　3－0　常盤会学園大
○本　学　3－2　京都教育大
○本　学　3－2　大阪女子短大
○本　学　3－0　神戸女子大
○本　学　3－0　大阪教育大
○本　学　3－0　相愛大
●本　学　2－3　佛教大
●本　学　0－3　びわこ成蹊大
（本学は3部2位）

■第36回西日本大学女子選手権大会
（6月24～25日、兵庫県立総合体育館）
○本　学　2－0　大阪大谷大
●本　学　0－3　神戸学院大

日本拳法部

■大阪府民体育大会
（5月16日、大阪市中央体育館）
▽弐段の部＝③升本　翔太
▽初段の部＝③若松　修司

■西日本学生個人選手権大会
（6月13日、吹田洗心館）
【個人】
▽初段の部＝柗宮　拓也（ベスト8）
▽弐段の部＝升本　翔太（ベスト16）

柔道部

■第60回関西学生優勝大会
（尼崎市記念公園総合体育館）
▽1回戦
○本　学　3－2　桃山学院大
●本　学　2－3　大阪大

アーチェリー部

■第30回関西学生テクニカルカップ
（6月6日、大阪大特設レンジ）
▽谷口　怜子　合計1043点
▽小山　順平　合計1062点

卓球部

■関西学生選手権大会
（5月28日～30日、京都府立体育館他）
【男子ダブルス】
▽2回戦
●川嶺・Schwarzbaver.T　0－3　龍谷大
【男子シングルス】
▽1回戦
●川嶺　宏和　0－3　大阪経法大
●中尾　祥大　2－3　近畿大
【女子ダブルス】
▽1回戦
●古川・山岡　0－3　京産大
【女子シングルス】
▽1回戦
○古川ひとみ　3－2　京産大
●山岡　紀子　0－3　大阪経法大
▽2回戦
●古川ひとみ　1－3　立命館大

■春季関西学生リーグ戦
【女子団体】
棄権により3部降格

■第80回全日本大学総合選手権大会関西予選
（6月20日、近畿大記念会館）
【男子団体戦】
●本　学　0－3　阪南大
●本　学　0－3　摂南大
●本　学　2－3　大谷大
●本　学　2－3　大阪大
（予選リーグ敗退）
【女子団体戦】
○本　学　3－0　京都府立大
●本　学　1－3　武庫川女子大
（予選リーグ敗退）

チアリーダー部

■第19回関西選手権兼日本選手権大会関西地区予選
（6月20日、大阪府立体育会館）
▽Division1＝⑥パイレーツ
（自由、規定演技の総合計点が260点を超えていたので日本選手権出場権獲得）

穂谷

バスケットボール部

■西日本学生選手権大会
（5月29日～6月6日、大阪府立体育館他）
▽1回戦
○本　学　87－75　園田女子大
▽2回戦
○本　学　70－65　環太平洋大
▽3回戦
○本　学　91－65　久留米工大
▽準々決勝
●本　学　55－82　大体大
（本学はベスト8）

長期留学帰国生の就活を支援

存分に企業情報をチェック

国際派就職EXPO「東京サマー」へバスツアー

本学キャリアセンターは、5月以降に長期留学から帰国した学部4年生の就職活動を支援するため6月21日、東京ビッグサイトで開催された「マイナビ国際派就職EXPO2010東京サマー」(毎日コミュニケーションズ主催)への無料バスツアーを初めて実施、86人の帰国生が参加した。

「東京サマー」は、グローバルな人材を積極的に採用する企業が集まり、留学経験者や海外の大学の卒業生らを対象に毎年1回開いている。今年は21、22の両日開かれ、アジア開発銀行や国際通貨基金をはじめ、外資系など約100社が参加、各社ごとのブースを設けた。

ツアーには、中宮学舎の藤岡弘樹キャリアセンター主任と旅行会社の添乗員2人が同行。男女別に分けたバス3台に分乗し、20日夜、中宮キャンパスを出発した。添乗員2人は本学の卒業生で女性専用バスに乗り、就活の経験談などを披露しながら会場へ向かった。翌21日午前9時に到着。10時のオープンを待った=写真。

帰国生は、各企業のブースを思い思いに回り、採用情報を聞いたり、担当者と面談したり、人気企業や国際機関の講演会にも参加するなど、イベント終了時間の午後5時半まで、存分に企業情報をチェックした。

22日早朝、枚方市駅などに戻った帰国生は、今回のバスツアーについて▽無料で直接、会場に行けた▽仲間と手分けして情報を集め交換できた▽多くの企業が参加していたので、選択の幅が広がった――などと評価しており、キャリアセンターでは、来年も企画したいとしている。

「潜在求人にも目を向けて」

中宮と穂谷で就職ガイダンス

長期留学から帰国した外国語学部、国際言語学部の4年生を対象にした「帰国留学生就職ガイダンス」が5月21日から7月17日にかけて、中宮キャンパスで3回、穂谷キャンパスで4回開かれ、中宮で約200人、穂谷では約20人(第4回除く)が参加。就職活動の〝遅れ〟を取り戻すかのように熱心に聞き入っていた。

中宮で行われた1回目のガイダンスでは、藤岡弘樹キャリアセンター主任が「4月下旬には内々定がピークを迎え、5月以降第2、第3次の選考が始まります。日本にいた学生で内定をもらっているのは現段階で約2割。まだ十分間に合います」と現状を話した。

また、就活には学校やナビ、新聞などを通じて行う顕在求人、学生自らが発掘し、直接応募する潜在求人があることを説明。「日本には約250万の企業がありますが、皆さんが知っている企業は1%もないぐらいです。業界地図などを検索し、潜在求人にも目を向けてほしい」と訴えた。

この後、3人1組になり、模擬面接。3人が受験者、面接担当者、観察者になり、それぞれの役割をチェックしながら、計3回行った=写真。

藤岡主任は「面接では、偽りのない自分を簡潔に伝える事。合否の分かれ目は、入社したいという熱意が伝わるかどうか」などとアドバイスした。

「目標しっかり持ち入学」

新入生自己発見レポート報告会 半面、進路に不安も

教務委員会とキャリアセンター委員会は教職員を対象に、今春の新入生(2687人)に実施した「自己発見レポート」の結果報告会を6月8日(短大部)、同10日(外国語学部)に中宮キャンパスで=写真=、同17日(国際言語学部)に穂谷キャンパスで、それぞれ開催した。学力や進路意識を知ることによって、今後の教育に役立てたいとしている。

報告会には、開発者のベネッセコーポレーションの担当者が出席。学部、短大部それぞれのレポート結果を項目ごとに分析。他の大学との数値比較も行い、指導方針などをアドバイスした。

基礎学力の項目では、他大学と比べて英語運用能力が高い。さらに外国語学部の学生は、就職試験(筆記試験)で試される「判断推理」の分野が例年になく強い傾向がみられ、他大学と比べても数値が高くなっていた。半面、国際言語学部、短大部では、この分野が弱みとなっている。

本学に期待していることは、「語学に関する勉強」「海外留学」「資格取得」が学部、短大部ともに87%以上で、目標をしっかり持って入学している学生が多いと言える。進路については、他大学の学生に比べ、外国語学部英米語学科は「国際志向」、スペイン語学科は「起業志向」、国際言語学部は「教育志向」の数値が高い。短大部では、入学時点で「編入」か「就職」を考えている学生が多かった。入試については、高校の早い時期に本学に入学すると決めていた学生が多く、大学案内やオープンキャンパスが役に立ったと回答している。

高校時代の学習習慣については、読書量が極めて少なく、学部、短大部ともに「ほとんど読まなかった」が6割近く存在、本に慣れさせる指導が必要だと指摘している。

こうした分析とともに、ベネッセの担当者は「進路に対しては、大多数の学生が不安を持っており、多くの学生が、先生方との交流の中で解決したいと考えているようだ。語学を勉強する、資格を取るという高い意欲で入学している一方で、大学生活に対する不安も強くなっている。早期にこの不安を払しょくするよう先生方に指導していただきたい」と助言した。

就職率

大学は89.3% 短大は82.4%

今春卒業生の結果まとまる

本学の平成21年度卒業生の就職率(5月1日現在)がまとまった。学部は89・3%で、前年度に比べ8・8ポイント減、短期大学部は82・4%で、前年度を10・1ポイント下回った。=表参考

全国平均(4月1日現在)と比べても学部で2・5ポイント、短期大学部で6ポイントそれぞれ下回った。

(5月1日現在)

【大学】

	性別	就職希望者	就職者	就職率
英米語学科	男子	328	299	91.2 %
	女子	776	690	88.9 %
	計	1104	989	89.6 %
スペイン語学科	男子	55	45	81.8 %
	女子	105	95	90.5 %
	計	160	140	87.5 %
外国語学部	男子	383	344	89.8 %
	女子	881	785	89.1 %
	計	1264	1129	89.3 %
	(前年)	(1437)	(1414)	(98.4)%
国際言語学部 国際言語コミュニケーション学科	男子	142	123	86.6 %
	女子	331	299	90.3 %
	計	473	422	89.2 %
	(前年)	(555)	(540)	(97.3)%
合計	男子	525	467	89.0 %
	女子	1212	1084	89.4 %
	計	1737	1551	89.3 %
	(前年)	(1992)	1954	(98.1)%

【短期大学部】

	性別	就職希望者	就職者	就職率
英米語学科	男子	12	5	41.7 %
	女子	403	337	83.6 %
	計	415	342	82.4 %
	(前年)	(496)	(459)	(92.5)%

既卒生にも就職支援

キャリアセンター所長からのメッセージ

森川 長俊・外国語学部教授

平成21年度の就職状況は、長引く世界不況から抜け出せずに、大学生への求人倍率が前年度の2・14倍から1・62倍に低下し、〝狭き門〟となりました。本学への求人数をみると、学部が4960件(前年比1723件減)、短期大学部2966件(同252件減)で、応募企業を探すのに四苦八苦している学生も数多く見受けられました。

この状況を打破しようと、緊急対策の一環として今年2月22日、大阪学生職業センターの相談員が中宮キャンパスを訪れ、初の〝出前求人〟を行いました。未内定学生への面談、企業への紹介状を発行するなど、学生56人を指導、うち4人が内定を取得しました。

さらに短期大学部と同様に、学部でも3月から就職アドバイザーを中宮、穂谷両キャンパスのキャリアセンター内に常駐させ、就職支援・相談に当たってもらっています。

最終的に、学部と短期大学部を合わせて250人を超す学生が就職先の決まらないまま、卒業しました。キャリアセンターでは、既卒生に対しても在校生同様の就職支援を行う方針です。

今年度の求人倍率はさらに低下して1・28倍となり、就職戦線は一層、厳しさを増すことが予想されます。キャリアセンターは、増員した専門のアドバイザーによる相談をはじめ、2月から㈱パソナグループと提携し、就活のサポート拠点として東京駅前と大阪・梅田の2か所に開設した「PASONA学職カフェ」の有効活用など、従前にも増した支援態勢を敷いて対応しています。

悩み事や相談があれば、迷わずキャリアセンターを訪ねてください。

決意新たに27か国へ
秋派遣留学生290人に合格証書

秋派遣留学生合格証書授与式が6月12日、中宮キャンパスのマルチメディアホールであり、290人が合格証書を手にした。谷本義高大学学長は「目標を設定しクリアする、出発までに日本の知識を蓄える、国を代表しているという自覚を持つ――この3つを大切にしてほしい」と留学前からの心構えを説いた。

授与式では各プログラム代表への合格証書授与、学長式辞に続いて山本甫国際交流部長があいさつ。「野菜の重ね煮」という料理の極意を例にひいて、「隠れた野菜の味を引き出すのと同様、みなさんの持つ無限の可能性を留学によって、伸ばしてほしい」と激励した。また、派遣生の予備教育担当教員を代表してスコット・リンド准教授は「多くの失敗や間違いを重ねることが、成長につながる」と祝辞を述べた。

最後に派遣学生代表の外国語学部英米語学科3年、上田亜季さん（2か国留学、フィンランド・イースタンフィンランド大学と中国・香港大学）と、同、和田博司君（学位留学、米・イーロン大学）が決意を披露した。

この日、合格証書を授与されたのは、留学プログラム別では、学位21人（米国18人、中国2人、スウェーデン1人）▽2か国6人▽ビジネス+中国語1人▽交換175人▽推薦18人▽英語／レギュラー 35人▽英語19人▽日本語インターン12人▽中国インターンシップ（日本語）3人。

留学生代表の決意表明（要旨）

上田 亜季さん

外国語学部
英米語学科3年
（2か国留学）

9月から2か国留学生として、フィンランドと香港へ留学します。それぞれの国で教育学を学びます。夢は母と同じ英語の教員になることです。両親が教員で、小学生のころから自然と、教員になりたいと思い始めました。

留学を目指して大学に入学し、IESを受講したころから「留学ノート」を書き始めました。なぜ自分は留学に行きたいのか、留学先で何を学ぶのか、それをどのように将来に生かすか、何でも書きとめていきました。

教育は、子どもたちの成長を一番身近に見つめ、人間形成を支えることができる仕事です。だからこそ教員への道を進みたいと思います。

2か国留学で、フィンランドと香港という全く違う文化を持った国へ留学し、それぞれの教育や文化を学び、自分の経験を将来子どもたちに伝えたい。英語を学ぶことで広がる新しい世界に目を向ける機会を与えたいと思います。

採用試験に受かれば、教員になれます。そして、教科書の内容を教えることはどの教員にもできますが、私は、教科書には載っていない、私にしか教えられないことを生徒に伝えていきたいのです。それが留学経験です。私が大切にしてきた言葉で締めくくります。

Where there is a will, there is a way.

和田 博司君

外国語学部
英米語学科3年
（米国学位留学）

この夏から2年間、アメリカでビジネスを学ぶ予定です。私には中学生のころからの夢があります。両親と祖母に家を建ててあげることです。高校卒業時、関西外大で留学を実現し、それを最大限生かしビジネスで成功を収める、という決断をしました。入学後、英語力を伸ばそうと、留学生のいるCIEへ向かいました。

うまくコミュニケーションが取れず悩んでいた時、1人の留学生と知り合いました。4か国語が堪能な彼に、なぜ日本語を学ぶのか聞きました。彼にとって言語とは、異なった文化や習慣の人たちとのコミュニケーションを可能にし、多くの考え方や生き方を学べるツールなのです。広い視野をもち、柔軟な考え方ができる人生は、とても豊かだと話してくれました。

それ以来、さまざまなことにチャレンジしました。2年生の夏、韓国で国際ボランティアに参加しました。世界6か国の人々が集まり、言葉の問題、習慣の違いなど生活は想像以上に大変でした。そんな時、彼の言葉を思い出しました。

夢は、自分の会社を設立することです。今回の留学は、その第一歩です。起業するため、留学先では特にマーケティングに力をいれて学びたいと思います。知識だけではなく、人との出会いから学ぶこと、世界中に人脈を広げることも、とても大切だと考えています。

「長期留学とキャリア形成」
海外へ羽ばたく2人にインタビュー

長期留学の経験を、キャリアアップにどう結びつけるか――。多くの外大生にとって、「留学と就職」は課題の一つ。その参考にと、海外での就職やインターンシップが決まった4年生2人に実体験を話してもらった。聞き手は、国際交流部の本田絵留美さん。

―― 2人とも、留学先での専攻と直結した分野への就職やインターンシップが決まったのですね。留学体験をどう生かしたのか、興味があります。まず、留学前に外大でどんなことを学んだのでしょうか。

木村 1年次に秋学期語学留学でオーストラリアに行きました。2年次の夏休みには、フランスの村で国際ボランティアに参加しました。ヨーロッパ各地から来ている高校生を統率して、古い施設を修復する作業を3週間。いずれも、いい経験になりました。

田嶋 穂谷キャンパスで、友だちとイベント系投資部というサークルをつくりました。イベント企画のほか、株式投資も研究し、簿記や企業会計の基礎を勉強しました。これが面白くて、簿記+会計学+英語力の3つを生かすために、米国で公認会計士になるために、学位留学しようと思いました。

――入学後、有意義な活動をしていますね。では、留学中の学びや生活はどうでしたか。

木村 留学先は、カナダを希望していました。でも、よく考えると、行った先では留学生同士が集まることが多い。アジアには、英語圏からの留学生が多いので、きれいな英語を話す仲間たちと友だちになれるんじゃないか。そう思って、香港にしました。思った通りで、アジア系の米人留学生が多いし、ヨーロッパから来る学生も英語が上手。彼らと友だち付き合いができ、香港を選んで正解でした。

田嶋 留学準備コースで勉強したつもりだったのに、1学期目で必修の米国史はさんざんな成績。これはいかんと図書館で午前3時まで勉強するなど、必死でやりました。慣れてきた2学期目に、学生団体のビジネス・フラタニティーに参加。英語力がぐんぐん伸び、コミュニケーション力もつきました。テコンドーの練習や日本人学生会の活動も、優先順位をつけてこなしました。

「教授に相談、進路決めた」
――木村 君

――就職活動を意識し始めたのはいつごろですか。

木村 ツーリズムの教授が、相談に乗ってくれました。エンジニア出身で、転職を繰り返し研究者になった人です。僕はオーストラリアの大学院進学を考えていたのですが、教授は「大学院での勉強もいいが、実際の職場で経験を積んだ方がいい」とアドバイスしてくれました。それで、帰国する3か月ほど前に大学近くのホテルへのインターンシップに挑戦することに決めました。紹介してくれたのは教授ですが、自分で手続きし、レジュメ（履歴書）を書いて送りました。

田嶋 日本人留学生対象の求人活動として、11月にボストンキャリアフォーラムがあります。留学2年目に参加し、受験した4社のうち1社は最終面接をデトロイトで受けることになりました。それが内定先です。米人4人、日本人2人と30分ずつの個人面接がありました。アピールしたのは、フラタニティーや大学の勉強などを通じて、何をしたか、何を得たか、ということ。語学力や専攻分野以外に、「＋α」が重要だと痛切に感じました。

――これから経験する海外での仕事について教えてください。

田嶋 企業の会計や税務をチェックする業務が主体の監査法人です。配属先はデトロイトにある日系企業対象のジャパニーズ・サービス・グループ（JSG）で、日本人、アメリカ人、台湾人などが働いています。

木村 インターンシップ先は、留学した大学の近くにあるホテルです。静かで環境が良いので、日本人観光客、特に団体客が多いそうです。

「語学、専攻と＋αが重要」
――田嶋 君

――将来の夢は？

田嶋 最低でも米国で10年は働きたい。会計事務所で「あいつといっしょに仕事をしたい」という存在になりたい。舞台があるなら、世界中どこででも働きたいです。

木村 仕事の内容がまだわからないので、何とも言えませんが、海外では転職はキャリアアップと考えられています。今はホテルを志望していますが、これから変わるかもしれません。

――最後に後輩へのアドバイスを。

田嶋 外大でも、留学先でも、興味があったら、とにかくやってみること。面白くないと思っていたことでも、やってみたら変わるかもしれない。それを繰り返せば、その先に自分の職業やキャリアが見えてきます。

木村 「行動すること」「目標を立てること」とはよく言われます。それに加えて、少し余裕を持とう。最初から自分の未来を一つに絞っていたら、ほかのことが見えなくなります。余裕を持って、いろいろなことを体験することが大切です。

登場人物紹介

木村 竜志君 外国語学部英米語学科4年
交換留学＝香港中文大学（ホスピタリティ・マネジメント専攻）
インターンシップ先＝香港・ハイアットリージェンシーホテル（8月末から）

田嶋 一輝君 国際言語学部4年
学位留学＝米ニューヨーク州立大学オルバニー校（会計学専攻）
就職内定先＝米国デトロイト・監査法人デロイト・トウシュ・トーマツ（来年1月から）

帰国生とひざを交えて
学位留学テーマに座談会 6/11

2年間の学位留学から帰国した4年生と在学生がひざを交えて懇談する座談会が6月11日、中宮キャンパスの国際交流センターで開かれた。参加した帰国生は米国学位留学を経験した5人で、いずれも外国語学部英米語学科に在籍。長期留学を希望する約70人の在学生が参加し、半数近くが英語特技入試で入学した1、2年生だった。

全体会では、ニューヨーク州立大学オルバニー校（会計学専攻）への学位留学2年目の国際言語学部4年、田嶋一輝君の司会で、パネルディスカッションが行われた。この後、各教室に分かれて帰国生一人ひとりと話す座談会＝写真。留学までの勉強方法や留学先での生活など具体的な質問が相次ぎ、在学生は貴重な情報を仕入れた。

全体会のパネリスト
- 吉田 文哉 君　ニューヨーク州立大学オルバニー校、哲学専攻
- 早岡 寛晃 君　同、経済学専攻
- 中村 美穂 さん　ホリンズ大学、社会学専攻
- 八十島 智子 さん　ガスタバスアドルファス大学、心理学専攻
- 植村 怜香 さん　バーミンガムサザン大学、アート専攻

全体会での主な一問一答は次の通り。

専攻は三者三様

――留学先の専攻はどうやって決めましたか？

吉田　外大でネイティブ教員による哲学の授業を聴講し、これをやってみようと思いました。

早岡　経済学にしたのは数学が得意だったこともあります。経済のニュースに接して、それがなぜ起こるのか、予測できないのか、といったことを勉強したいと思い、専攻を決めました。

中村　新聞記者志望だった1年次に、社会学の授業を履修しました。これが面白く、将来役に立つかなという思いもありました。

八十島　入学時から英語教員志望でした。英語もできて、生徒の気持ちもわかる教員になりたいと思って、心理学を専攻しました。

植村　アートがすごく好きだったというのが一番の理由。2年留学するからには、好きなことじゃないとできないと思います。

――留学先でどんな勉強をしましたか？

吉田　まず哲学の歴史。古代から中世、そして現代まで幅広く勉強しました。分野としては倫理学を集中して学びました。

早岡　選択できる授業では、国際経済学、中でも金融論を中心に取り組みました。

中村　ソーシャル・ジャスティスを集中受講し、環境や人種差別、貧困について勉強しました。

八十島　社会心理学や認知心理学などを受講しました。セミナーのクラスでは、自分で心理学的リサーチをして結果を導き出し、それをまとめるという授業もありました。

植村　実技がほとんどで、私は油絵などのペインティングが中心でした。卒業制作は、与えられたギャラリーのスペースに、自分の作品群を展示するというものでした。

――留学前のTOEFL対策は？

中村　苦手を発見することから始めました。私の場合は長文で、ひたすら単語を勉強した覚えがあります。

植村　IESの授業で与えられた課題などで、英語に触れる機会が多かった。その場その場で力をつけるようにしました。

留学先での授業、就活……

――留学先での授業など、大学の雰囲気は日本と大きく違います。

中村　小さな大学だったので、多いクラスで20人、小さかったら5人というのもありました。一人ひとりの発言にみんなが興味を持ち、反応してくれるので、臆病になることもありませんでした。

――米国で就職活動をした経験は？

早岡　ボストンキャリアフォーラムに参加しました。現地で日本の企業と接する唯一の機会とも言えます。

中村　米企業へのインターンシップ申し込みは英文でレジュメ（履歴書）を書くことがあり、留学先のキャリアセンターで書き方を教わりました。

「ランチタイムfeat.帰国生」開く
お昼を食べながら和気あいあいと

ランチを楽しみながら留学の話を――。留学帰国生たちが企画した「ランチタイムfeat.帰国生」が6月22日～7月20日、国際交流センターで開かれた。毎週火曜と金曜の週2回、帰国生らが自分の経験をもとにアドバイス。リラックスした雰囲気で、留学を希望する学生たちも気軽に質問していた。

目的は、▽留学に興味がある学生の留学準備をサポートする▽お昼を食べながら、留学帰国生と外大生のネットワークを広げる▽留学先の専門分野で、何が学べるのか共有する▽TOEFLの目標点に達するためのノウハウを伝える――の4点。

留学したい学生たちは、多くの疑問や不安を抱えている。一方、帰国生は就職活動などもあって、留学で得た知識や情報を彼らとシェアする時間が十分に取れないのが現状。そこで、昼休みを有効に使って留学先の情報や学んだことを後輩と分けあい、互いにwin-winの関係にしたいと、帰国生らが企画した。

第1回（6月22日）は留学を希望する学生約80人が参加した。スピーカーは、国際言語学部4年の田嶋一輝君と大学院前期2年の犬伏崇之君。テーマはTOEFL対策で、犬伏君は1か月で2000語以上の英単語を覚える秘訣を紹介した。ホスピタリティがテーマの第5回（7月6日）は、交換留学経験者2人が留学先での勉強や活動を紹介。約60人の参加者を前に、米オクラホマ州立大学に留学した国際言語学部3年の谷村佳子さんは「航空会社に関心があり、専攻を決めました。高級レストランでの接客実務を勉強するなど、意義深い留学でした」とスライドを多用して、話を進めた＝写真。

社会人が熱く語る〝留学と就職〟
6/5 初の試みに120人が参加

社会人2年目を中心とした先輩にアドバイスしてもらう初の試み「社会人が熱く語る“留学と就職”」の催しが6月5日、中宮キャンパスの国際交流センターで開かれた。アドバイザーは、2009年卒業の9人と今春卒業の1人、学位留学中で米企業に就職が内定している1人の計11人。留学予定の3年生など約120人が参加し、留学先での生活をはじめ、就職活動や企業での経験などについて熱心に質問した。

教室で先輩全員が自己紹介した後、ラウンジで25分ずつ3回のセッションに分けて個別懇談＝写真。少人数の対話形式だったため、活発な質疑応答があり、各ブースとも熱気に包まれた。

ガイダンスなどで聞かされる一般論でなく、体験が聞けるとあって、学生からの質問も具体的。「日本の企業は大学で学んだ内容をあまり評価しないのでしょうか」との問いに、メーカーで営業職に就いている先輩（男性）は「マーケティングを学んだが、営業には直接役に立っていない。しかし、仕事と重なってくることはいくらでもある。希望する部署で働くために努力している」と答えた。

また、ホテルから外資系企業に転職した先輩（女性）は留学の成果について、「自分を周りと比べることがなくなった。やって来たことに自信がついたのだと思う。就職活動でも行動力が重視される」と話した。

この後の全体会では、イベント企画者の一人、白坂優樹さん（米リッチモンド大学・推薦留学、資生堂勤務）が「情熱スピーチ」。後輩に伝えたいこととして、▽職場では仕事の効率化が求められるので、学生時代からタイムマネジメントのくせを付ける▽おごらずに謙虚でいる▽職場にはネガティブな人もいるが、周囲に流されずに行動する▽一生懸命は人を動かす▽働く目的を考える▽夢や目標を持つ――の6点を力強くアピールした。

米イースタンイリノイ大学と単位互換協定 提携校331校に

本学は米国イリノイ州チャールストンのイースタンイリノイ大学と新たに単位互換協定を結んだ。海外単位互換提携校は50か国・地域の331校となった。

イースタンイリノイ大学　1895年、イースタンイリノイ州立師範学校として創立。1921年、イースタンイリノイ教育大学となり、57年から現校名。学生数は大学院生を含め約12000人。44もの専攻分野があり、クラスサイズは平均20人。学生対教員の割合は15対1で、少人数制クラスで授業が行われている。米国中西部の公立大学でトップレベルの大学の一つとして評価されている。

Vol. 17 研究室から

外国語学部 ルイス・A・ディマルティノ 教授

いずれは南米諸国連合とEUの相互関係の調査を

日本経済の専門家に

——世界が熱狂したW杯も終わりました。母国アルゼンチンは残念でしたね。両親がイタリア人で、先生はアルゼンチン生まれ。サッカーもさぞや……

ディマルティノ　もちろん。するのも見るのも大好きです。本学に来る前の羽衣国際大では半年間ですが、サッカー部の監督もしていました。今回のW杯、アルゼンチンはマラドーナが監督になり、期待していたのですが…。これで5大会続けて、4強入りできず、悔しい思いをしています。

——25年ほど前から日本の研究をしていますが、どうしてですか。

ディマルティノ　アルゼンチンの大学を卒業後、メキシコの国立自治大学で経済学修士を取得しましたが、このときはまだ何を研究するか決めていなかったんです。このあと大学院大学に進学し、そこのアジア・アフリカ研究所では、日本をはじめ、中国、インドなど5つの研究科がありました。当時、日本は優れた製造技術を誇り、アメリカを追い越すほどの経済成長でした。ラテンアメリカでは、アメリカやヨーロッパ経済の専門家はいましたが、日本経済について研究する人はほとんどおらず、それで日本独特の資本主義経済の勉強をし、日本経済の専門家になろうと思いました。

日本人技術者の労働形態に興味が

——日本に来るきっかけと、研究テーマを教えてください。

ディマルティノ　日本はオイルショックからの立ち直りが早かったと言われており、産業ロボットなど技術革新をいち早く導入したのがその一因とされています。大学院大学での修士論文のテーマは、電子技術を労働工程に導入したあとの、日本における労働の質的変化について調べました。それで日本の技術者の雇用形態や労働条件、人事管理に強い関心を持ち、日本で研究してみたい、と思うようになり、法政大学のフェローシップに応募したところ合格しました。

——来日したあとは、どんな研究をしていますか。

ディマルティノ　日本における人材管理の歴史と現状に関する研究が中心でした。京都大学での博士論文も、1990年代前半の電器産業を中心とした技術者の人事管理がテーマで、担当教授の紹介で日本の電器メーカーの人事担当者や技術者から直接取材し、まとめました。

科研費でEU国境地域の地域経済調査を

——最近はオランダをはじめ、イタリア、ドイツなどヨーロッパの国々でフィールド・ワークをしていますね。それはどんな研究ですか。

ディマルティノ　2002年に科学研究費補助金を受けた調査メンバーの一員に加わり、4年にわたりオランダとドイツやイタリアとスロベニアなどEUの国境地域で、国境を越えた地域経済圏の形成とそのガバナンス構造について海外調査し、欧州統合の意義を共同研究しました。特に、日本と同様に地場産業が経済の基盤を支えてきたイタリア北東部の産業集積地で、地場産業がグローバリゼーションの中で興廃しているのに、興味を持ちました。

EUの結束政策の変化を再調査

——今年度から、再度、EUの調査を行うそうですが、今回の目的を。

ディマルティノ　前回調査から10年近く経過しました。今回も科研費を受け、EUで進められている情報社会化をはじめ、域内地域間の経済的、社会的不均衡の是正を目的とした結束政策がどのように変化しつつあるのかを調査します。そして、日本の改革で、環境保護と生活の質的向上を両立するために、政府や自治体、社会的諸団体が関与する経済調整のあり方に、何らかの示唆を与えることも考えられます。

——このあと考えている目標テーマがありましたらお聞かせください。

ディマルティノ　今、南米では、私の母国のアルゼンチンやブラジルなど12か国が加盟した「UNASUR」(南米諸国連合)が結成され、EUをモデルにした政治、経済の統合を目指しています。すでにEUで行われたような越境協力も、EUのアドバイスを受けながら進んでいます。同じような調査を南米で実施し、EUと南米の相互関係を研究してみたいです。

歴史の主人公、という自覚を持って

——京都大学では通算8年間、研究生活を送っていますね。研究が楽しかったのでしょうか、それとも、いろいろ、忙しかったのでしょうか。

ディマルティノ　私の研究生活の中で、とても印象に残っている時代です。経済的にも苦しく、生活していくために、京都外大や京都産大、龍谷大などいろんな大学でスペイン語の講師をしながら研究を続けていました。それで、博士論文がパスするまでに8年間かかりました。妻と知り合ったのも京都です。

——本学ではラテンアメリカ経済やスペイン語を教えていますが、本学の学生に言いたいことは。

ディマルティノ　社会経済の展開と私たちの行動には深い関係があります。その上で、歴史の一部である私たちの日常の生活が成り立ちます。学生一人ひとりが、自分が歴史の主人公である、という自覚を持って学習に取り組んでほしいと思います。

プロフィル

1953年、アルゼンチン生まれ。1979年、ブエノスアイレス国立大学卒。1987年、人文・社会科学系大学院大学エル・コレヒオ・デ・メヒコで日本研究修士を取得後、来日。法政大学大原社会問題研究所の客員研究員を経て、京都大学大学院に入学。1997年、経済学博士号。2008年から関西外国語大学教授。論文の「オランダ・ドイツの国境地域におけるユーロリジョン」が「EU経済統合の地域的次元」(ミネルヴァ書房)に収録されるなど著書多数。夫人は日本人で、京都で洋菓子教室を主宰。

「鳴門市ドイツ館」川上館長が講演

ドイツ人捕虜の生活ぶり

日本で初めてベートーベンの「交響曲第九番 歓喜の歌」が全曲演奏された板東俘虜収容所(当時、徳島県板野郡板東町)の資料を展示する「鳴門市ドイツ館」の川上三郎館長による講演会「第一次世界大戦時のドイツ人捕虜の話」が6月12日、穂谷キャンパスで開かれた＝写真。国際言語学部ドイツ語コミュニケーションコースの授業として行われ、学生と教員約20人が捕虜の生活ぶりを興味深く聞き、改めてドイツへの関心を寄せていた。

第一次世界大戦(1914－1918)で日本軍は、ドイツの租借地となっていた中国・山東半島の青島を陥落させ、ドイツ兵約4500人を捕虜として日本へ送還した。板東俘虜収容所には、約1000人が収容され、1917年から約3年間過ごした。

川上館長は、ドイツ兵捕虜がどのような生活をしていたのか、写真を交えながら講演。当時、ドイツは世界一の科学と技術を誇る国。川上館長は、「板東では、自主的な運営が認められていたため、彼らは自身の職歴、趣味、才覚を生かし、肉屋や写真屋、菓子屋、ボウリング場などを次々と作り上げ、施設の数は約80にも上り、一つの小さな町を形成していたと言われています」。収容所外でも農園や鶏舎、手作りのテニスコートやサッカー場などもあった。

文化活動も盛んで、楽団4、管弦楽団2、吹奏楽団、合唱団があり、週に1度は音楽会が開かれ、時には演劇も上演された。謄写版印刷も活発に行われ、絵はがきや音楽、演劇のプログラムなどが刷られていた。川上館長は、第九が演奏された「1918年6月1日(土)午後6時半開演」のプログラムを映像で示しながら、「当時の日本では知られていなかった多色刷りの技法で印刷されていました」と説明。

地域の人々にも牧畜、西洋野菜の栽培、建築、音楽など、さまざまな技術を指導するなど、日常的に交歓する風景が当たり前のように見られたという。

講演後、他の収容所との違いについて質問を受けた川上館長は「所長の裁量でドイツ人のプライドを尊重し、人道的に捕虜を扱ったことではないでしょうか」と話した。

中宮は3007人

クラブ・サークル加入調査

中宮学舎・学生部と穂谷学舎・学務課は平成22年度のクラブ、公認サークルの加入状況をまとめた。中宮(6月3日現在)は3007人、穂谷(5月31日現在)は986人で、前年度に比べ計239人減っている。中宮は公認サークルの277人減をトップに計330人減少、逆に穂谷は体育会、文化会とも昨年に比べ131人と大幅に増えた。

一方、新入生が未加入のクラブ、サークルは、中宮が文化会、体育会と公認サークル合わせて15、穂谷では文化会が19、体育会が5となっている。今回は、新入生がまだ学生生活に慣れていない時期での調査だけに、学生部などでは今秋の次回調査までには、未加入のクラブ、サークルは大幅に減るとみている。

体育会へ入部した新入生は、両学舎で16人増の240人。最も多かったのは中宮が硬式野球部の14人(全部員57人)、穂谷がバスケットボール同好会の31人(同111人)。文化会では中宮学舎が競技ダンス部の20人(同62人)、穂谷ではダンス部の20人(同80人)となっている。

外大このひと 旬な人

劇団「クセックACT」を率いて30周年

外国語学部教授

田尻 陽一 さん

「言葉の魅力に満ちた非リアリズム演劇の劇的空間の面白さを味わってもらえた」。スペイン内戦で銃殺されたガルシア・ロルカの「五年経ったら」を、自身が座付き脚本家で、プロデューサーも兼ねる劇団「クセックACT」(名古屋市)の結成30周年記念として、名古屋、福井、金沢、大阪(本学)の巡演に成功させた手ごたえとともに振り返る。

ロルカの作品は、国家権力と遺族の意向で長く封印されてきた部分がある。その後の学問的な研究で明らかになった状況を、可能な限り反映させた日本語台本を仕上げた。

30年前、スペイン語劇祭を手がけてきた名古屋の仲間3人に新劇団設立を誘われ、①役者の肉体が舞台に存在すること②時間や社会にしばられず、自由という非日常性を基調とした演劇を目指すということで参加した。

すでに龍谷大学で教壇に立っていた。もともと芝居好きで随分と舞台を観てきた。スペインでシェイクスピアの「リア王」をスペイン語で観劇していて、王が愛娘コーディリアの亡骸を抱いて登場する場面で突然、涙があふれた。日本語の「リア王」では出なかった涙が劇団活動を促した。その後、住んでいた神戸・六甲での阪神大震災が脚本制作にも乗り出すよう急き立てた。

正規の俳優団員は5人。客演者が加わる。能役者のように腰をため、すり足で動く独特の演技を求め、俳優の肉体を鍛え、作品の完成度を高めた。30年間、1年も欠かさず公演を続け、2002年にはスペイン・バロック黄金時代(17世紀)のカルデロン作「人生は夢」で初のスペイン公演を実現。05年から5年連続で「ドン・キホーテ」「ヌマンシア」「ラ・セレスティーナ」などを次々に同国で上演した。

スペインの演出家協会の雑誌に、歌舞伎の大御所・松本幸四郎の「ラ・マンチャの男」と並列で紹介された。アルマグロの演劇祭で「ドン・キホーテ」を上演したとき、舞台を見た名も知らないスペイン人の料理屋女将から出来栄えへの賛辞として打ち上げの酒肴を差し入れられたことを大きな誇りに感じている。今後はロルカの未上演の劇作「観客」などにも挑んでいく。

クセック結成30周年記念
「五年経ったら」公演
中宮キャンパスで

劇団「クセックACT」の結成30周年を記念した舞台公演「五年経ったら」が5月29日、中宮キャンパスの谷本記念講堂で公開講座として開かれた=写真。

演劇ファンの市民や本学の学生、教職員ら約300人が観劇。演目は、スペインの劇作家で詩人でもあるガルシア・ロルカ(1898~1936)の作品で、劇団設立者の一人、田尻陽一・外国語学部教授が翻訳し、脚本を書いた。

「五年経ったら」は1984年、クセックがガルシア・ロルカを初めて取り上げた作品。副題は「時間の伝説」で、時間と、それに絡みつかれた愛と死が主題となって、舞台が進んだ。女優の真行寺君枝さんも出演。時間をテーマにした舞台の奇想天外な展開と、迫力満点の演技に、客席から大きな拍手が送られた。

私の押し

『蘭学事始』

外国語学部教授 根岸 裕

杉田玄白著/中央公論新社 1450円+税

ABCすら習ったことがない。しかも、まともな外国語辞書など全くない、江戸時代は安永年間のことだ。なのに、初めて手にした西洋の書物の内容を何としても理解したいので翻訳するという。これはどうみても無茶な話である。

事実、この難題に挑んだ著者は、その意気込みとは裏腹に「それはまことに艪も舵もない船で大海原に乗りだしたかのように、はてしなくひろびろとしてとりつくしまもなく…」と途方に暮れてしまう。無謀な行為と気付き、「ただあきれているばかりであった」とも述懐している。この本は『蘭学事始』で、著者は蘭学医の杉田玄白(1733~1817)。西洋の書物とは『ターヘル・アナトミア』というオランダ語の解剖学の本だ。

翻訳作業には同じく蘭学医の前野良沢らも加わり、1か月に6~7回の勉強会を開いて進められた。多くの障害を承知のうえで玄白をこの難事業に駆り立てたのは「(医師として)人体構造の原理をわきまえたい」との一心からだった。4年がかりで翻訳は完成し、『解体新書』の表題で出版された。途中で原稿を11回も書き直したという。

『蘭学事始』は、玄白が死の2年前に残した回想録だ。ちょうどその40年前に出た『解体新書』の翻訳について、今となっては誤訳もたくさん見つかるだろう、と認めたうえで以下のように続けている。「しかしなにごとにおいても、はじめて新しい説をうちだそうというようなときは、当初から後日の批判を恐れているようなけちな了簡では、ついにどんな企てをもしでかすことができないものである」(以上、引用はすべて『杉田玄白 蘭学事始』=中公クラシックス=から)。

83歳にして、なお意気軒昂。パイオニアとしての自負とチャレンジ精神は晩年になっても衰えることはなかった。「けちな了簡…」のくだりからはすごみすら伝わってくる。

堀井名誉教授が講演

私立大学図書館協会阪神地区協議会(加盟69大学)の2010年度第1回総会が5月27日、理事校の本学中宮キャンパスで開かれた。42大学54人が参加した総会に先立ち、新村出記念財団理事長として広辞苑第六版の出版に携わった堀井令以知・名誉教授が講演した。

堀井名誉教授は、「広辞苑」の編纂者で、「平凡」という言葉や生き方を好んだ新村出さん(1876~1967)の思い出話や、広辞苑第六版で新たに載せた若者言葉や方言、新語などを紹介。「まったり」という京ことばについて、「料理用語だったが、現代の若者がよく使う『ゆったりとくつろいでいるさま』という意味を新たに加えた」と話した。

また、最近は感動した際に使われる「鳥肌が立つ」や、準惑星に格下げとなった「冥王星」などについてもふれた。

新刊 本学教員の書いた本

『日本語作文術 伝わる文章を書くために』
野内良三著、中公新書/740円+税

『日本における難民訴訟の発展と現在』
渡邉彰悟ほか編、新垣修ほか著、現代人文社/4500円+税

『貿易実務のスペイン語 ビジネスメール例文集』
前田貞博著、白水社/2800円+税

図書館からのお知らせ

■夏休み特別貸出
特別貸出開始日:7月13日(火)
ただし、貸出期間が1週間の図書(就職・検定・指定図書および教材など)は7月20日(火)から
貸出冊数: [図書館] 7冊まで
[AVライブラリー]3点 まで
[穂谷コントロールルーム]6点まで
返却期限日:すべて10月1日(金)

■夏休み期間中の開館時間
中宮=8月2日(月)~9月24日(金)
穂谷=7月23日(金)~9月24日(金)
いずれも 月~金は9時から16時45分
土は9時から15時45分

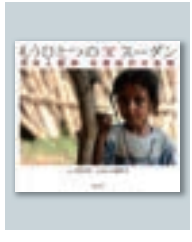
■夏休み期間中の休館日
[中宮] 8月7日(土)、8月11日(水)~16日(月)、8月21日(土)
[穂谷] 8月4日(水)、8月7日(土)、8月11日(水)~16日(月)、8月21日(土)
(いずれも日曜・祝日は休館)
※詳しくは掲示板、ホームページで

新着本 図書館ニュース LIBRARY NEWS

『さくらの気持ち パンダの苦悩』
唐 亜明著、岩波書店 所蔵:中宮図書館 3F

中国で生まれ、日本で暮らす著者。どちらも大切に思うこの人の目は、日本人が気づかない日本人の姿と、知らなかった中国人の考え方を伝えています。違う国の者同士がわかり合うために必要なこと。それは、相手に合わせることでも自分を主張することでもありません。ただ、日本人がパンダをいとおしいと思うように、中国人が桜を美しいと感じるように、「素直な気持ち」を大切にすることなのかもしれません。

『もうひとつのスーダン 日本人医師 川原尚行の挑戦』
川原尚行、内藤順司著、主婦の友社 所蔵:中宮図書館 3F

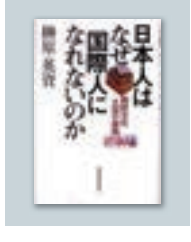


写真は、時に文章よりも強く読者に働きかける。この本には、スーダンで支援活動を続ける日本人医師・川原氏のことばと、写真家・内藤氏によって撮影された写真がある。しかし、収録されたほとんどの写真に川原氏は写っていない。きっとフレームの外に、写真の中の人々と同じ場所にいる姿があるのだろう。切り取られた場面を見つめるまなざしを考えながら読んでほしいと思う。

『龍馬のことば』
紫舟著、朝日新聞出版 所蔵:穂谷図書館 3F

NHK大河ドラマ「龍馬伝」の題字を手がけるなど、本学OGで今注目の女流書家が、坂本龍馬の言葉の中から、人々を奮い立たせるものを選び出して「書」にした。見開きにひとつのフレーズを取り上げ、ことばが発せられた背景、著者が受け取ったメッセージを解説文として載せているビジュアル・ブック。激動の時代の「志」が蘇る1冊。

『日本人はなぜ国際人になれないのか』
榊原英資著、東洋経済新報社 所蔵:穂谷図書館 3F



欧米文化を移入する際、外国語を外国語のまま使わず、新たな日本語を作り、それに置き換えてしまうという日本独特の翻訳文化が、外国語をしゃべれなくしている。翻訳による外国語・海外文化の理解は「わかったつもり」になっただけだ。日本人が国際人になれない原因を突き止め、日本を海外に発信するために発想の転換を訴える。

平成21年度 中宮、穂谷両キャンパス 授業評価まとまる

授業評価の質問項目

学生の自己評価
- あなたの出席率は
- 予習・復習を十分にしたと思いますか
- 積極的な態度で授業に取り組んだと思いますか

授業に対する評価
- クラスのサイズは
- 難易度は
- 進度は
- テキスト（または教材）は
- コースシラバスに沿っていましたか
- 内容は有益でしたか
- 説明は明瞭で適切でしたか

教員に対する認識
- レポート、宿題、テスト等を適切に課しましたか
- 十分、準備をして臨んでいると感じましたか
- 熱意を感じましたか
- 授業開始、終了時刻を守っていましたか
- 授業時間外でも質問などに応じてくれましたか
- この授業を他の学生に勧めたいと思いますか
- 総合評価は

外国語学部

中宮学舎 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY Nakamiya Campus

学生から見た本学の〝白書〟

【学生の自己評価】

英米語学科

◇専門必修科目

出席率を「8割以上」と回答した学生の割合は、春学期が89％であるのに対し、秋学期は83％と、若干ではあるが低下している。また、授業への取り組みに関して、「予習・復習を十分にした」「積極的に授業に取り組んだ」学生の割合（「そう思う」と「強くそう思う」）は、春学期、秋学期とも70％程度である。これらの結果は前年度と同程度だが、専門必修科目にとって、出席と積極的な授業への取り組みは必要不可欠である。年間を通じた学生のさらなる努力が期待される。

◇専門選択科目

出席率について6割近い学生が90％以上出席したと回答している。授業への実質的取り組みについて、「予習・復習を十分にしたか」の割合を見ると、意欲的に予習・復習をした学生（「強くそう思う」「そう思う」）の合計が58％、消極的な学生（「全く思わない」「あまり思わない」）の合計が14％、「どちらとも言えない」が29％である。また、「積極的な態度で授業に取り組んだか」については、66％が積極的、32％が消極的であったと回答し、教員に質問をしたことのない消極的な学生も2割ほど存在している。これらの情報から、出席率の高さと学生の授業への取り組みは必ずしも結び付いていないことが指摘できる。

スペイン語学科

◇専門必修科目

出席率「8割以上」が春学期89％、秋学期85％と、前年度より増加している。また、予習・復習の取り組みに対する肯定的評価は春、秋学期とも61％、積極的な授業態度についてはそれぞれ72％と73％で、前年度よりわずかではあるが増えている。いずれの数値も前年度から着実に上昇していることが評価できる。今後は特に予習・復習に対して、より一層主体的に取り組むことが求められる。

◇専門選択科目

出席率を「8割以上」と回答した学生は春学期86％、秋学期83％で、年間を通じて高い数値を示しており、学生の勤勉さを表している。予習・復習についても、「十分した」と答えた学生が、春学期47％、秋学期53％で、5年前の平成16年度が春学期41％、秋学期37％であったことを考えると比率は格段に上がっている。しかし、前年度と比較すると、春学期は6ポイント、秋学期は2ポイント、わずかながら減少している。「ゆとり教育」の影響なのであろうか。今年度の動向が気になるところである。「積極的な態度で授業に取り組んだ」と考えている学生は、春学期56％、秋学期64％で、3年前の平成18年度年平均58％という数値と比べると、確実に上昇している。ただ、春と秋の数値の差が気になる。春学期の段階から秋学期の積極さで学習に励んでもらいたい。

◇共通教育科目　資格科目

共通教育科目について春学期の出席率は、「9割以上」と回答した学生が61％（前年度60％）であり、これに「8割以上」と答えた学生を合わせても84％（同82％）である。これが秋学期になると、「9割以上」と回答した学生が52％（同53％）で、これに「8割以上」と答えた学生を合わせると79％（同79％）となる。春学期と秋学期を比較すれば下落がみられるが、出席への意欲については前年度と比較して若干の改善傾向にある。

一方、スポーツ健康科学と資格科目については、それぞれ「8割以上」の高出席率者が春学期79％（秋学期75％）、同95％（同92％）をマークしており、改善が認められる。特に資格科目では、「積極的な態度で取り組んだか」については、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた数値が69％（前年度66％）となっている。前年度に続き増加傾向が見られ、資格取得への積極性を感じさせる（春学期の数値）。ただし、「予習・復習を十分にしたか」との質問に対しては、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた数値は50％（前年度52％）で、やや低下している。

共通科目については「予習・復習」が38％、「積極性」が59％と出ており（春学期）、前年度の数値（それぞれ37％と55％）と比べて改善傾向が見られる。出席率と併せて数値の向上が見られ、今後さらに期待したい。

◇IES／ESL

出席率を「9割以上」「8割程度」と答えた学生が、春・秋学期ともに90％を超えた。「積極的に授業に取り組んだか」には、80％以上の学生が「強くそう思う」「そう思う」と回答しており、授業への関心の高さを示している。ESLに関しても、出席率では、春・秋学期ともに90％以上の学生が「9割以上」「8割程度」と回答した。また「積極的に授業に取り組んだか」では、春・秋学期ともに90％前後の学生が「強くそう思う」「そう思う」と回答した。

◇CIE

出席率「8割以上」が春学期86％、秋学期85％と通年で維持されている。これは、秋学期の出席率が大幅に低下した前年度と比較すると顕著な特徴である。予習・復習の取り組みに対する肯定的評価は、春学期72％から秋学期61％へと低下している。一方、授業への積極的態度については、春学期68％、秋学期73％と上昇している。これも前年度とは反対の傾向であり、継続して授業に出席し、内容を聞きとれるようになった結果、積極的な授業態度で臨むことができるようになったことがうかがえる。

【授業に対する評価】

英米語学科

◇専門必修科目

クラスサイズに対する回答の90％近くが、肯定的回答（「強くそう思う」と「そう思う」）であった。これは、専門必修科目で実施している少人数教育の成果であるといえる。また、クラスの難易度に対する回答は、「適切」と回答した割合が春学期の57％から秋学期では62％に向上した。このことは、年間の授業の中で授業内容への理解度を深めることができた学生が増加したことを意味し、授業の内容が「有益だった」「とても有益だった」と感じた学生の割合増加（春学期75％、秋学期79％）とも呼応した、望ましい傾向であるといえる。今後も、より一層充実した授業が期待される。

◇専門選択科目

授業の難易度について「適切」と感じた学生が52％であるのに対し、「かなり難しかった」、または「すこし難しかった」と考える学生が合わせて42％存在している。しかし、講義を受けたことを有益と考えている学生は78％（「有益だった」「とても有益だった」）に上っており、感覚的な難易度の判断にかかわらず一定の教育効果を学生の側も認めているといえる。また、進度、教員の説明の分かりやすさ、教員の準備や講義に対する熱意についても85％を超える学生がおおむね肯定的に評価している。今後もこの数値を維持させることが期待される。

スペイン語学科

◇専門必修科目

クラスサイズについては「適当」「やや適当」を合わせて春学期81％、秋学期85％であり、前年度と同様、適正サイズが維持されているといえる。授業の難易度は、「適切」が春学期41％、秋学期44％に対し、「少し難しかった」がそれぞれ40％と39％で、前年度と比較して「適切」と考えている学生が増加している。一方、教員の説明の分かり易さについては、「いつも分かり易かった」と捉えている学生が春学期38％と秋学期43％、「だいたい分かり易かった」がそれぞれ38％と39％である。これは前年度とほぼ変わらない数値で、多くの教員がたゆまぬ努力をしていることがうかがえる。

◇専門選択科目

難易度、進度に関して、「適当・適切」と答えた学生は、年平均で、それぞれ46％と78％になっており、前年度の49％、77％と比較してほとんど変化はない。興味深いのは、進度に関して「適切」と答えた学生が、春学期73％に対して秋学期には82％と9ポイント増えていることである。学生が進度に慣れるのか、あるいは教員が進度を落とすのか、気になるところである。「授業の有益性」に関しても、肯定的な回答は年平均75％で、前年度とほぼ同じ結果であるが、5年前の平成16年度が66％であったことを考えると、授業内容の改善傾向は歴然としている。授業の難易度や有益性に関する満足度が、授業のレベルを落とすことで得られたものではないことを願う。

◇共通教育科目　資格科目

クラスサイズについては、資格科目においては「大きすぎる」と「大きい」を合わせた数値が12％である（前年度及び前々年度は9％、前々々年度は15％）。共通教育科目については23％が「大きすぎ

〈11面へ続く〉

Course Evaluation

教員に対する肯定的な評価目立つ

る」もしくは「大きい」と答えており、前年度23％、前々年度25％、前々々年度23％の数値からすると、このあたりで「とどまり」を見せているような印象である（いずれも春学期の数値）。ちなみに、いずれの科目においても60％以上の学生がクラスサイズを「適当」「やや適当」と答えていることから、これら科目におけるクラスサイズの改善は緊急要件ではないように思われる。しかし、共通教育科目においては、資格科目と比べて「大きすぎる」「大きい」が10ポイント以上、上回っている事実には引き続き留意しておきたい。

なお、これら科目全般について、「難易度」と「進度」について「適切」と答えたのは、それぞれ57％（前年度と前々年度58％）、75％（同75％、同74％）であり、従来とほぼ同様である（いずれも春学期の数値）。「テキストの活用」「コースシラバスに沿っていたか」「有益だったか」といった項目についても、肯定的な回答が前年度同様70％ないしは80％近い数値を占めている。

◇IES／ESL

IES、ESLともに、クラスサイズ、進度、テキストの活用に関する質問に対する回答は、肯定的な評価が目立った。IESでは、クラスサイズに関しては、90％以上の学生が「適当」「ほぼ適当」と回答した。進度に関しても、「適切」だけで70％を超えた。さらに「テキストの活用」についても、「十分に活用された」「だいたい活用された」を合わせると70％以上になる。授業の難易度を問う質問に関しても、春・秋学期ともに「適切」と回答した学生が70％を超えた。ESLでは、クラスサイズに関しては、「適当」「やや適当」と回答した学生が90％を超えた。進度については、90％前後の学生が「適切」と回答し、テキストの活用についても、70％近くの学生が「十分に活用された」「だいたい活用された」と回答した。

◇CIE

難易度に関して、「すこし難しかった」と「かなり難しかった」の上位2項目の合計が、春学期には57％であったものが秋学期には52％に下がり、進度に関しても「速い」という回答が17％から11％に下がっている。これは、初めてCIEを経験した学生が、少しずつスペイン語だけの授業に慣れていったことを示していると考えられる。授業の有益度（上位2項目合計で春学期89％と秋学期93％）やクラスサイズの評価（上位2項目合計で春学期95％と秋学期91％）を見ても、授業に対する学生の満足度の高さは明瞭である。

【教員に対する認識】

英米語学科

◇専門必修科目

教員の授業態度に対して、教員の授業準備と熱意に関する肯定的な回答（「だいたい感じた」と「いつも感じた」）はそれぞれ80％以上であった。また、教員の説明に対して、約80％が肯定的回答であり、授業を他の学生に勧めたいと思う学生の割合も約70％であった。このように、学生は教員の授業に対しておおむね満足していることが分かる。しかしながら、前年度と同様、依然として教員に質問したことのない学生が一定の割合存在している（春学期19％、秋学期14％）。教員による、学生がより積極的に質問しやすい授業運営に関する、さらなる取り組みが期待される。

◇専門選択科目

教員による講義の準備度、熱意に関しては85％以上の学生が肯定的評価を与えている。また、8割近い学生が授業を有益と考え、7割ほどが他の学生に勧めたいと答えている。講義に対する総合評価の総計として「大変良い」「良い」との回答が両学期ともに7割を超えており、多くの教員による努力の成果がうかがえる。

スペイン語学科

◇専門必修科目

教員に対する認識は、「熱意を感じましたか」の肯定的評価は春学期83％、秋学期86％、「この授業を他の学生に勧めたいと思いますか」は、それぞれ71％と76％、総合評価は74％と78％である。各項目の数値が大幅に増加した前年度よりもわずかではあるが増加している。特に、「質問などに応じてくれましたか」の肯定的評価は春学期71％、秋学期76％で、前年度より3～5ポイント増加している。これらの数値から、教員の熱意が学生に通じ、教員と学生とのコミュニケーションがおおむね円滑に行われていることがわかる。

◇専門選択科目

「授業の準備」と「教員の熱意」に関する肯定的な回答は、それぞれ年平均81％と83％で、5年前の16年度がともに75％であったことを考えると、評価は確実に上がってきている。興味深い現象は、「教員の熱意」に関する肯定的な解答が、春学期78％から秋学期88％と10ポイントも上がっていることである。「説明の分かり易さ」と「総合評価」に関する肯定的な回答に関しても、それぞれ、春学期は69％と65％、秋学期は78％と75％で、同様の現象が生じている。総合評価に対する「良い」と「大変良い」の合計はここ数年、年平均70％前後で推移しており、授業に取り組む教員の姿勢に対する評価は定着傾向にある。

◇共通教育科目　資格科目

教員は「授業時間外でも質問などに応じてくれましたか」について、肯定的な答えは、共通教育科目では春学期で61％、（前年度55％、前々年度47％）で、さらに秋学期になると62％（前年度60％）に上昇している。資格科目においても春学期は65％（前年度60％、前々年度57％）だったが、秋学期になると70％（前年度68％）になり、ポイントを増やしている。

いずれも、顕著な改善を認めることができると言って良い変化であろう。

「授業開始、終了時刻を守っていましたか」について、肯定的な答えは、共通教育科目で88％（前年度87％、前々年度88％）、資格科目で93％（前年度92％、前々年度93％）、スポーツ健康科学で91％（前年度90％、前々年度92％）であった。これらの数値についても「とどまり」感があるが、少しでも「時間厳守」の印象を高めたいところである（いずれも春学期との比較）。

このほか、教員の「熱意（肯定＝春学期84％、秋学期85％）」「準備度（肯定＝春学期84％、秋学期84％）」、さらに「宿題やテストの適切性（適切＝春学期75％、秋学期77％）」について、肯定的な回答がいずれも前年度同様70～80％前後で推移しており、おおむね良好な回答結果だと言える。

◇IES／ESL

IESに関しては、教員に対する肯定的な評価が目立ち、否定的な回答はごく少数にとどまった。教員の「熱意を感じましたか」「授業開始、終了時刻を守りましたか」「授業時間外でも質問などに応じてくれましたか」の質問に関しては、90％前後の学生が肯定的な回答をしている。また「この授業を他の生徒に勧めたいと思いますか」に対しては、80％近くの学生が「強くそう思う」「そう思う」と回答。「総合評価」を問う質問に関しても、同程度の学生が「大変良い」「良い」と回答している。ESLにおいても教員に対する評価はおおむね良い。90％前後の学生が「教員の熱意を感じましたか」「授業開始、終了時刻を守っていましたか」との問いに対し、肯定的な回答を寄せている。また、80％以上の学生が「この授業を他の学生に勧めたいと思いますか」の質問に「強くそう思う」「そう思う」と答え、「総合評価」でも「大変良い」「良い」と回答している。

◇CIE

「準備」「熱意」「開始、終了時刻」の項目は、春学期（上位2段階合計それぞれ88％、93％、93％）、秋学期（同91％、98％、97％）を通して非常に高評価である。ただ、「授業時間外での質問等の対応」「他の学生に勧めたいか」「総合評価」の項目は春学期においては若干低い（上位2段階合計それぞれ75％、74％、78％）が、秋学期には回復している（同87％、87％、90％）。その理由を考えてみると、「教員は質問等などに応じてくれましたか」という項目に対して「質問したことがない」の回答が春学期には21％あったものが、秋学期には13％に減っている。おそらくこれは、学生たちが授業や教員に慣れてきたことを表すものであろう。また、「他の学生に勧めたいと思いますか」についても、「どちらとも言えない」が20％から12％に減っており、春学期の時点では、まだ判断を迷っていたことがうかがえる。総合評価の78％から90％への上昇もこれと連動したものであろう。このことに関しては、春学期における学生からの積極的なアプローチがもっと必要であるということと、教員側からは春学期の緊張した時期にこそ質問などをしやすい環境を整えることが必要であろうと思われる。

学生へのメッセージ
分析を終えて

外国語学部教務部長・学長
谷本　義高

諸君は外大に入学して正解である

いや、目標を実現するために用意された勉学環境を自身が最大限に活用する、という実行力が伴ってこそ正解である。専門科目を学ぶ交換留学、多岐にわたる目標に道を示すカリキュラムやプログラム、英語教授法の学位を有する英語教員、教育に捧げる熱意は他大学にも全く引けをとらない教授陣等、本学には特色のあるさまざまな環境が整備されている。他の外国語系学部や国際系学部と比較するまでもない。大学名や偏差値というイメージやブランドの信奉は危険である（大学ブランド説）。ブランドという衣を脱ぎ捨て、自分を正面から見つめ直し、目標達成を自らの努力で獲得せよ。これが、大学生自律説だ。

授業に「出席するだけ」という受け身な態度では、卒業はできるかもしれないが、目標を達成することはできない。授業外における自身のアグレッシブな取り組みが必要である。日本語を用いて表現や説明できないことが、外国語「を」学ぶだけで可能になることはない。外国語「で」学べ。何を学ぶべきかは自身が再考せよ。これは外大生の使命である。

授業は、教えてもらう場ではなく、自ら欲する知識や内容、教養を「渉猟する場」である。夢や目標に明確性が備わるほど、一方的に強制されるだけの勉強では満足できなくなるはずだ。夢の実現のためには、授業における各自の問題意識を明確にするとともに、教員と学生の双方が十二分に準備を行ってから授業に臨む必要がある。

目的意識を持ち、自律して主体的に学べ。夢の実現のために、今をがんばれ！

授業評価分析担当教員

【外国語学部】
谷本義高教授、井尻直志教授、玉井久之教授、和佐敦子教授、池田亮准教授、小谷克則准教授、槙太一准教授、村下訓准教授、山西博之講師、吉留公太講師（以上、教務委員）、辻井宗明教授

【短期大学部】
井登大策教授、加堂裕規教授、多田幹裕教授、浅田忠久准教授、笠井正隆准教授、四宮康恵准教授、平田一郎准教授、（以上、教務委員）

【国際言語学部】
神田修悦教授、江平英一教授、林登美子教授、三輪雅人教授、池田遊魚准教授、片山慶隆講師（以上、教務委員）

短大部英米語学科

中宮学舎 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY Nakamiya Campus

【学生の自己評価】

英米語学科

◇専門必修科目

出席率「8割以上」が春学期83％、秋学期82％であった。「予習・復習を十分にしましたか」の設問には、春学期54％、秋学期58％が「強くそう思う」「そう思う」と答え、「どちらとも言えない」が、春学期34％、秋学期30％であった。また、「授業に積極的に取り組んだと思いますか」には、「強くそう思う」「そう思う」は、春学期71％、秋学期75％、「どちらとも言えない」が春学期23％、秋学期19％であった。高い出席率に比べ、予習・復習を十分にし、積極的に授業に臨む学生の割合が低い。これは、出席が重要であるという学生の認識の表れであるが、同時に出席さえしていれば単位はもらえるという甘えも露呈しているのではないか。教員は、自学自習や積極的に授業参加を促すような授業を展開することが求められる。

◇専門選択科目

出席率は「9割以上」「8割程度」を合わせて春学期80％、秋学期76％で、前年度と比べて若干向上している。ただし、出席率に関しては、前年度が前々年度に比べて低下していたことから、依然授業への出席が必須であるということへの意識の低さが見られる。前年度同様に、科目全体で授業出席に関して学生への意識付けを強化する必要がある。その半面、予習・復習に関する質問への回答は、「強くそう思う」「そう思う」が春学期52％、秋学期55％で、前年度と比べてそれぞれ3ポイント、6ポイントと大きな改善がみられた。教員の予習・復習へのたゆまぬ意識付けが実を結んだと考えられる。加えて、「積極的に授業に取り組んだと思いますか」は、「強くそう思う」「そう思う」が両学期とも66％で、前年度と比べて春学期1ポイント、秋学期2ポイント改善されていることから、授業への積極性が若干向上している。「予習・復習」及び「授業への積極的参加」が前年度と比べて改善が見られる中で、学生の授業への出席が懸念される結果となった。

◇総合教育科目

出席率について、スポーツ健康学以外では8割以上出席した割合が春・秋学期でそれぞれ81％、77％（前年度81％、78％）と、残念ながら前年度同様秋学期は80％を切っている。

また、「積極的に授業に取り組んだと思いますか」との問いに対して「強くそう思う」「そう思う」を合わせて春学期58％、秋学期61％（前年度53％、58％）とやや向上している。しかし、予習・復習について「十分にしたと思いますか」という問いに対して「強くそう思う」「そう思う」を合わせた回答は春・秋学期それぞれ41％、46％（前年度36％、43％）と、前年度及び両学期とも35％だった前々年度より向上したとはいえ、一層の向上が求められる。「授業を楽しく意欲的に受けるためには予習が大切」「学んだことはその日のうちに頭の中で整理する」をより心がけて欲しい。一方、スポーツ健康学Ⅰでは出席率が春・秋学期それぞれ83％、80％（前年度はともに71・5％）、「積極的な取り組み」が90％、87％（前年度はともに83％）と、前年度を上回る好結果となっている。

◇資格科目

出席率については「8割以上」が春・秋学期でそれぞれ92％、93％である。他の科目全体の春・秋学期の出席率83％、79％と比べると、さすがに資格を取るという目的意識がはっきりしているため良い。しかし予習・復習について「十分にしたと思いますか」という問いに対しては「強くそう思う」「そう思う」を合わせて春学期41％、秋学期55％とあまり良くない。他の科目の春・秋学期49％、54％と比べて春学期は悪く、秋学期もほぼ同じというのは、資格を取ろうとしているにしては問題である。また、「積極的に取り組みましたか」という問いに対しては「強くそう思う」「そう思う」を合わせて春・秋学期それぞれ67％、78％と、他の科目と比べると多少ましではある。しかし、資格を取ろうという目的意識を持って受講している以上80％以上はあるべきだろう。

◇IES

出席率については、通年で「9割以上」「8割程度」を合わせて88％と、まずまずであった。また、「予習・復習を十分にしましたか」の設問には、「強くそう思う」「そう思う」が73％で、他の科目に比べて良いにせよ若干改善の余地があるようだ。また、「授業に積極的に取り組みましたか」では、「強くそう思う」「そう思う」が82％である。全体として積極的な態度がうかがえるが、今後のさらなる奮起と努力を期待したい。

【授業に対する評価】

英米語学科

◇専門必修科目

クラスサイズ「適当」「やや適当」は、春学期84％、秋学期85％、難易度「適切」は、春学期60％、秋学期69％、進度「適切」は、春学期80％、秋学期88％であった。教員の説明に関しても春学期80％、秋学期86％が「いつも」「だいたい」わかり易かったと回答している。また、春・秋学期とも約8割以上がテキストは「十分」「だいたい」使用され、春学期77％、秋学期84％が授業は「いつも」「だいたい」シラバスに沿っていたと答えている。ほとんどの項目で秋学期に数値の上昇が見られるが、これは春学期の学生評価結果を教員が参考にし、改善を図った結果ではないだろうか。また、「レポート、宿題、テスト等は適切に課しましたか」の質問に対して、春学期74％、秋学期79％が適切と答えている。この数値は教員に対しての好評価ととられがちであるが、学習意欲の異なる学生の主観的判断に過ぎないとも言える。学生が今後〝適切〟と客観的に判断できる共通の具体的基準を提示する必要があるのではないだろうか。

◇専門選択科目

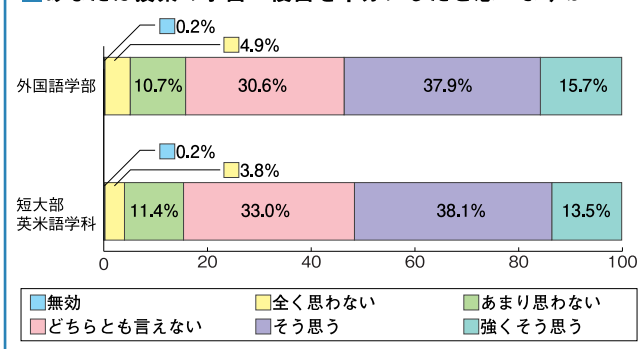
授業の進度は「適切」と回答した学生は、春・秋学期平均77％で、難易度については「適切」と回答した学生が春・秋学期平均58％で、前年度と変化がないか若干の改善がみられる。また、教員の授業における説明については、「いつもわかり易かった」「だいたいわかり易かった」が通年平均79％で前年度と比べて微増となった。クラスサイズは「適当」「やや適当」が春・秋学期平均で75％、テキスト使用度は「十分活用された」「だいたい活用された」が春・秋学期平均79％で、前年度よりそれぞれ2ポイントと1ポイント改善された。さらに授業がシラバスに沿っていたかに関しては、「いつも沿っていた」「だいたい沿っていた」が通年平均79％と高く前年度と同評価であった。このことから、教員が各クラスの学生の特徴を踏まえて、授業内容を適切に対応してきた結果であると考える。授業の有益性に関しては、「とても有益」「有益」が春学期76％、秋学期79％で、前年度に比べてそれぞれ3ポイントと1ポイント減少しており、宿題・課題の量に関しては、「適切」が通年平均72％で前年度より微減という結果であった。

〈13面へ続く〉

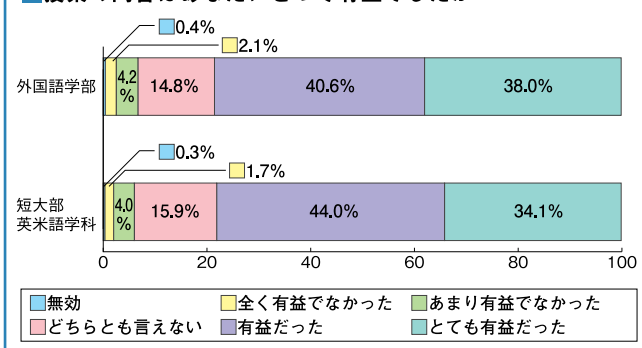
中宮学舎 外国語学部・短大部英米語学科

Nakamiya Campus

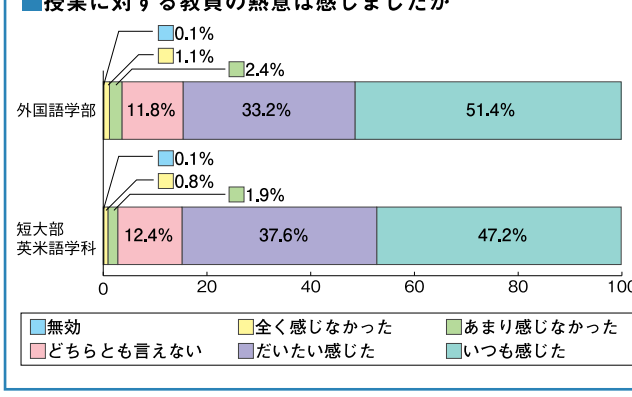
■あなたは授業の予習・復習を十分にしたと思いますか



■授業の内容はあなたにとって有益でしたか



■授業に対する教員の熱意は感じましたか



時間・体力・能力をフル活用してほしい

学生へのメッセージ 分析を終えて

短大部教務部長・教授
井登 大策

短大部の皆さん、自分の進路希望の具現化に向けて充実した大学生活を送っていることでしょう。2年生の皆さんには、就職活動や編入学試験の時期が来ましたね。就職試験も編入学試験も難しいですよ。皆さんの今までの取り組みが試される時です。

目標の実現化に向けて、より一層学習に励んでもらいたい。この願いを込めて、今回の授業評価分析を見つめてみると、授業への取り組み方に不満を感じる。例えば、「予習・復習を十分したと思いますか」という質問で「強くそう思う」が14％、積極的な態度で授業に取り組んだと思いますか」という質問では「強くそう思う」が19％である。一方、授業の難易度の質問では「適切」が60％、授業の速度では「適切」が79％で、授業に対する総合評価は「大変良い」と「良い」を合わせると72％である。つまり、授業の予習・復習の取り組みがなくても、授業に困ることなく、満足しているということである。大半の学生は予習・復習不足に対して反省していないということである。教員と学生双方は授業の在り方、質の向上について考えてみるべきであると思う。本学の履修規程の中に「90分の授業に対して教室外における180分の自学自習を行うこと」という項目がある。この規程は、外大生としての「確かな語学力」と「豊かな人間力」を身につけるために必要な勉強量を定めている。この規程に照らしてみると、皆さんの予習・復習を含めた勉強量の不足に気付くことであろう。皆さんには十分な時間と体力と能力がある。その時間・体力・能力をフル活用して、自分の持てるものを最高に輝かせてほしい。その真剣な取り組みの中に、より一層輝かしい将来があなたの目の前に現れてくるものと信じる。

Course Evaluation

質問しやすい環境づくりに配慮を

国際言語学部

穂谷学舎

総じて前年度と比べて同評価ないし改善といった結果が見られた。

◇総合教育科目

クラスのサイズについて「適切」「やや適切」が春・秋学期それぞれ65％、73％、「大きすぎる」「大きい」がそれぞれ17％、13％と、改善の余地が指摘された。クラスの難易度について「適切」が58％、61％（前年度50％、54％）、クラスの進度について「適切」がそれぞれ77％、82％（前年度71％、76％）、「すこし速かった」「かなり速かった」合わせて19％、15％（前年度25％、21％）となり、年を追って好評価が増加している。また、授業における教員の説明が「いつもわかり易かった」「だいたいわかり易かった」が75％、78％（前年度68％、75％）、さらに「授業の内容が有益だったか」についても「とても有益だった」「有益だった」が72％、78％（前年度71％、75％）とさらに向上している。

スポーツ健康学においても、「授業の内容が有益だったか」に「とても有益だった」「有益だった」が春・秋学期それぞれ91％、92％と高い評価をしている。このように、「授業評価」を受けて各先生が工夫されたことが結果に表れている。クラスの難易度については、「かなり難しい」「少し難しい」が合わせて35％、33％（前年度43％、39％）。この割合をさらに下げることについて、授業内容のレベルを単純に下げることではなく、学生の「自ら学ぶ姿勢」をより豊かに育てる指導内容を工夫することで実現したいと考える。

◇資格科目

クラスの難易度については、「適切」が春・秋学期それぞれ60％、57％で他の科目全体の58％、61％とほぼ同じである。進度については、春・秋学期で「適切」が75％、77％でこれも他の科目全体の78％、81％よりは少し悪く、「すこし速かった」と「かなり速かった」が20％、19％でその分、他の科目（18％、15％）より多くなっている。もっともこれは資格科目という授業の性質上、「これだけは教えねば」という内容が多くて速くなるのはやむを得ないであろうし、それを考えれば難易度がほぼ同じというのはむしろ良い方であると考えるべきかもしれない。

◇IES

年間を通して、クラスサイズは「適当」「やや適当」が87％、授業の進度は83・5％が「適切」としている。一方、難易度は「適切」が春学期56％から秋学期61％と、5ポイントの上昇がある。「かなり難しかった」と「すこし難しかった」を合わせると、春学期35％から秋学期27％というように少し授業が秋学期に易しく感じるようになっている。通常、テキストなどは後になるほど高度になるので、易しく感じてくるのは実力が伸びたからと言えそうだ。また、授業の有益さを問う項目では、「とても有益だった」と「有益だった」が通年平均で88％であり、9割近くの学生が授業におおむね満足している状況がうかがえる。だが、これらの結果に甘んじることなく、さらに充実した授業にするように創意工夫が望まれよう。

【学生の自己評価】

国際言語コミュニケーション学科

◇コース指定科目（ドイツ語、フランス語、中国語と国際ビジネス関連専門選択科目）

全学年で87％～97％の学生が7割以上の出席をしているものの、8割以上の出席に絞り込んだ場合、1年春学期の89％を筆頭に学年を追うごとに低下し、4年の春学期で62％、秋学期で61％となっている。また春学期より秋学期で低下する傾向が見られ、その差の最も大きいのが3年の8ポイント（春79％→秋71％）である。コース指定科目の第二外国語では、授業への出席は必要最低条件であるが、9割以上の出席がみられるのは1年の春学期で最高の72％（前年度74％）、秋学期で56％（同66％）、2年の春学期で59％（同62％）、秋学期で48％（同53％）、3年の春学期で54％（同50％）、秋学期で40％（同41％）に下がり、4年春学期では30％（同31％）まで落ち込み、秋学期で最低の27％（同42％）となっている。4年については例年通り就職活動の影響が顕著であり、就職活動の早期化により、その影響は3年秋学期にまで及んでいる。前年度と比較すると、4年の春学期で落ち込んだ比率は、秋学期に持ち直すことなくさらに悪化しており、21年度の厳しい就職状況を反映していることが分かる。また1、2年で9割以上出席した学生の比率は前年度と比べると2～10ポイント減少。特に1年の秋学期では前年度の66％に対して56％と、2年の春学期（59％）よりも低く、多少気がかりである。

学習への取り組みについては、全学年を通じて「予習・復習を十分にしたと思う」が、「積極的な態度で授業に取り組んだと思う」を下回っているのは例年通りである。「積極的に取り組んだと思う」学生は、学年を通じて62％～72％だが、「予習・復習を十分にしたと思う」学生の割合はそれより低く、その差は1年春学期で23ポイントと一番大きい。秋学期で12ポイントに差が縮まり、2年春学期で13ポイント、秋学期で12ポイント、3年春学期で11ポイント、秋学期で10ポイントとほぼ横並びであるが、4年春学期で再びその差が20ポイントに広がり、秋学期でも18ポイントである。授業外での自主学習が十分でなくとも、授業には積極的に取り組んだと考える学生が少なからずいることを示している。2、3年でその差は縮まるものの、4年で再び拡大している。就職活動のために出席できず、従って予習・復習も十分できない状況はやむをえない現実であろう。それならば、積極的な態度で授業に取り組むことも困難なはずである。それにもかかわらず出席した際には、授業に積極的な態度で取り組んだと考えているのか、あるいは、授業外での自主学習が思うように進まないが故に、授業に出席できたときは、その反動で積極的な態度で取り組んだと考えているのか。あるいは考えたいとの気持ちの表れなのだろうか。

【教員に対する認識】

英米語学科

◇専門必修科目

学生の教員に対する評価は総じて高い。80％以上の学生が年間を通し、教員の授業に対する熱意を感じ、また教員は十分準備をして授業に望んでいると答えている。授業時間外を含めた学生の質問に対する教員の対応ぶりにも肯定的評価がみられた。ただ春学期19％、秋学期15％の学生が質問をしたことがないと答えており、この数値は、英語必修科目30人クラスに換算すると約5～6人に相当する。これを多いと見るか少ないと見るかは各教員によって異なるであろうが、授業についていけない学生を出来るだけ出さないためにも、学生がより質問しやすい環境づくりに教員は配慮する必要があると言えよう。

◇専門選択科目

総合評価は「大変良い」「良い」が通年平均71％、「授業を他の学生に勧めたいと思いますか」への回答結果は、「強くそう思う」「そう思う」が通年平均約70％で、前年度と比べてそれぞれ若干減少している。しかし、教員の授業への準備については春学期81％、秋学期84％と高い評価を維持し、前年度と変化がない。さらに教員の熱意は「だいたい感じた」「いつも感じた」が通年平均85％と若干の改善が見られた。このことから、多くの学生が教員の態度に満足していると考えられる。また、授業の開始、終了時刻の遵守についても通年約88％と肯定的な評価を得ている。教員の授業時間外の対応に関しても、「いつも応じた」「大体応じた」が通年平均72％で前年度より2ポイント改善された。

◇総合教育科目

教員は「十分、準備をして授業に臨んでいると感じましたか」について、「いつも感じた」「だいたい感じた」が79％、84％（前年度78％、83％）、授業に対する「総合評価」が「大変良い」「良い」が64％、71％（前年度63％、68％）といずれの項目についても評価が高くなり、しかも、ほぼすべての年度で春学期から秋学期へと進んでの評価が高く、「学生の学び」と「教員の教え」の相互の熱意がより高まっていく様子が感じられる結果となっている。また、スポーツ健康学では、同じ項目の評価について、「教員の熱意」88％、87％、「授業時間」94％、94％、「総合評価」90％、92％とさらに高い評価が示されている。

◇資格科目

「教員は十分、準備をして授業に臨んでいると感じましたか」について、「いつも感じた」「だいたい感じた」が春・秋学期でそれぞれ83％、90％とどちらも80％を超え、他の科目の82％、85％より良い。また授業に対する教員の熱意を感じたかについても「いつも感じた」「だいたい感じた」が春・秋学期で84％、89％で他の科目全体の83％、86％より良い。資格科目については教えるべき内容がある程度決まっていて教え易いかもしれないということを考えても、教員は良くやっているというべきであろう。授業に対する「総合評価」が「大変良い」「良い」が春・秋学期それぞれ72％、81％とより改善されているのは、他の科目全体における「大変良い」「良い」の70％、72％と比べても心強いことである。

◇IES

教員の授業に対する準備や熱意を問う設問では、肯定的な回答が通年で91％を占めている。また、教員が「授業開始、終了時間を守りましたか」では肯定的な回答が約96％、「授業時間外でも質問に応じましたか」では89％となっている。「この授業を他の学生に勧めたいと思いますか」や、「この授業の総合評価は」では、肯定的な回答が82％であった。「授業に対する評価」の分野と合わせると、大部分の学生が教員の授業に対する姿勢と内容を高く評価しているようだ。だが決して現状に満足することなく、今後は100％を目指して教員側の一層の努力を期待したい。

「授業に積極的に取り組む」ためには、教室内での学習態度もさることながら、教室外での自主的取り組みが前提となり、その授業外での取り組みの如何が逆に授業の「理解度」や授業への「参加度」を決める。このことを、学年を問わず学生にどう意識化させるのか。また、そのような学生の意識改革と就職活動の両立をどう指導していくのか、非常に困難な課題である。

◇コース指定以外の科目

コース指定以外の科目は、コース指定科目あるいは国際言語学部専門科目との関連性のみならず、授業形態や履修者数などにおいても、極めて多岐にわたる。それらをひとまとめにして平均値をみる限り、学生の出席率はかなり高く、課題への取り組みに関する評価はおおむねかなり高い。コース指定以外の科目の場合、履修生の70％前後が1、2年次生という事情があるので、出席に関する学生の高い自己評価は、かなり現状に近いと推測される。

全学年春・秋学期平均で8割以上授業に出席したと回答した学生は84％を占める。そのうち、9割以上出席したと回答した学生は、62％を占めるが、秋学期には8ポイント下降する。また、「予習・復習を十分している」と答えた学生は、春・秋学期平均で58％にすぎず、そのうち、「強くそう思う」と答えた学生は17％と、心もとない。積極的な授業活動への参加を肯定した学生は春・秋学期平均で66％と、これにもあまり高い自己評価をしているわけではない。強く肯定した学生は、21％にとどまる。

〈14面へ続く〉

関西外大の最新ニュースはホームページにも掲載しています http://www.kansaigaidai.ac.jp/

5割弱の学生が授業「難しい」

コース指定

ただ、春学期と秋学期を比べると、春学期は出席率が低下する半面、自身の予習・復習に関して肯定的な評価をする学生が5ポイント増加する。秋学期になると、わずかではあるが学生の積極性が増すのであろうか。ただし、学生の自己評価が教員の学生評価と合致しないならば、学生の評価はいささか甘すぎる可能性も否定できない。

【授業に対する評価】

◇コース指定科目

コース指定科目においては、授業に対する学生の評価は総じて良好である。クラスサイズ・テキストの活用・シラバスとの整合性・課題の量に関しては、いずれも8割の学生が「適切」と回答している。授業を「有益だった」とする学生は8～9割弱にのぼり（1年85％、2年82％、3年80％、4年87％）、教員の説明を「わかり易かった」とする者も8割近くいる（1年78％、2年79％、3年81％、4年90％）。

問題があるとすれば、授業の難易度と進度である。4年次は別として、授業を「難しい」とする学生が5割弱おり（1年45％、2年46％、3年45％）、授業が「速かった」と感じる学生も2割以上存在している（1年24％、2年23％、3年21％）。最終的に9割近くの学生が授業を有益だと評価している以上、問題はないとも考えられる。だが、この傾向は過年度よりみられるだけに、学生自身の印象とは別に、実際に授業の内容をどれだけ理解し、吸収し、定着させているのか、一度じっくりと検証してみる必要があるのではないだろうか。

さらに気になるのが3年次生の回答結果である。学年が上がるほど大学に慣れ、学習方法にも習熟していくのが自然であるが、多くの点において数値が思わしくない。2年秋学期と比較すると、授業を難しいとする者が5ポイント増、進度を適切とする者が4ポイント減、授業を有益とする者が3ポイント減であり、1年春学期と比較するとマイナス8ポイントの大幅な低下となっている。これは2年次までの語学学習を中心とした科目から、専門科目への移行にともなう現象であると解釈される。来年度より開講される「インテンシブ」に向け、スキルの学習からコンテンツベースの授業へ、学生をどのように誘導していくべきか、工夫が求められるところである。

◇コース指定以外の科目

クラスサイズは、「やや適当・適当」が春学期72％、秋学期77％に対し、「大きい・大きすぎる」が春学期13％、秋学期9％である。これは授業に対する評価8項目中、不満足の意を表す値としては一番高い。科目内容に見合う適性規模を図る努力も求められるが、教員の創意工夫次第で、多人数クラスにおいても満足度を高めることは十分可能である。本学FD授業研究・ワークショップで紹介された諸事例が参考になる。

難易度は、「適切」が春学期62％、秋学期64％。進度は、「適切」が春学期77％、秋学期76％で、両項目において高い肯定的評価を得ている。毎回の授業で、受講生の反応度・理解度を見極めようとする担当者の努力が見て取れる。

教材活用度は、「十分」と答えた学生が春学期38％、秋学期40％、「だいたい」が春学期29％、秋学期28％。授業に対する評価8項目中、肯定度は最も低い。教材は教授者が熟慮の上、選択・作成されているはずであるが、シラバス作成段階で教材活用方針をより明確にしておくことが求められる。

「シラバスに沿っていましたか」については、「いつも・だいたい」が春学期76％、秋学期79％。毎回の授業で進度の調整を余儀なくされることが多いが、シラバス設計が念入りに行われていることがわかる。

「授業内容は有益でしたか」については、「とても有益・有益」と答えた学生は春学期76％、秋学期79％。役立つ内容を提供できている。

「説明は明瞭で適切でしたか」についても「いつも・だいたい」が春学期79％、秋学期81％で、高い評価ではあるが、100％の「いつも」を目指す余地はある。FDの「授業公開」を利用し、他教員の授業例から学び、また自分の授業に対する同僚教員からの評価も求めていく姿勢が望まれる。

【教員に対する認識】

◇コース指定科目

授業の開始・終了時間は、どの学年学期も9割近くが「守られていた」と評価している。教員の準備・熱意に対しては1年で2～3ポイント低くなっているものの、他は高評価が90％近くあり、いずれも全科目平均を上回っている。

一方、「教員は授業外でも質問に応じたか」との問いについては、「いつも応じた」「だいたい応じた」と答えた学生が1年では70％を切り、2年が75％前後、4年が80％前後であった。学生からの質問を受け付けない教員がいるとは信じ難いが、「質問をしたことがない」と答えた学生が各学年とも2割程度いる事と合わせて、気になる点ではある。

授業に対する「総合評価」は、1年春学期において「大変良い」「良い」と回答した学生が昨年度より6ポイント増加している。これは喜ばしい傾向である。

関東のある研究機関が行った調査によれば、「教室の後方に座る学生はテストの成績が悪い一方、授業への評価は厳しい」との結果が出たそうである。積極性に欠ける学生は先生に厳しく自分に甘い傾向がある事を、日々教壇に立つ者は直感的に知っている。授業が面白くないから後ろに座るのか、後ろに座っているから授業が分らなくなるのか。さて、どちらか。

教員は、学生たちが前の席を奪い合うような魅力的で質の高い授業を展開するよう努力と工夫を怠ってはならない。同時に学生諸君も、教員の熱意に疑問符を付けたくなった時には、自分自身の熱意や日ごろの取り組みも合わせて省みる姿勢が必要だ。

◇コース指定以外の科目

教員は「十分準備をして授業に臨んでいると感じましたか」「授業に対する教員の熱意を感じましたか」という質問に対し、春学期では「いつも感じた」「だいたい感じた」と回答した学生は、それぞれ82％、84％で8割を上回った。

教員は「授業時間外でも質問などに応じてくれましたか」という問いには、「いつも応じた」「だいたい応じた」が3分の2以上を占める（春学期67％、秋学期68％）。ただ、「あまり応じなかった」が7％と前年度より微増している。「質問したことがない」学生が4分の1近くもいることは毎年課題となっているが、教員が常に丁寧に学生の質問に答えることで、より多くの学生が質問をしやすくする環境を整えていくことが必要であろう。

「この授業を他の学生に勧めたいと思いますか」については、「強くそう思う」「そう思う」と回答した学生が、春学期70％、秋学期73％といずれも7割を上回った。また、「授業に対する総合評価は」という設問には、「大変良い」「良い」が春学期72％、秋学期74％と答えている。前年度よりも向上し、学生の満足度は年々増しているといえる。

コース指定以外の科目に対する学生の評価は高まっているが、質問に関する項目など、やや不満が窺えるところもある。教員には、質問に対する姿勢だけでなく、さらに授業の質を向上させることで、学生の期待に応えていくことが望まれるであろう。

全科目全学年で学期平均83％の学生が8割以上出席していることから、出席率は総じて高いといえる。ただしコース指定科目の学年ごとのデータによれば、8割以上出席した学生は1年春学期を筆頭に学年を追うごとに減り、4年で約60％まで下降する。春学期より秋学期で減る傾向は例年のことながら、3年でその差が著しい。就職活動の早期化による影響が3年秋学期にまで及んでいることは明白である。気がかりなデータとしては、コース指定科目1、2年で9割以上出席した学生の比率が前年度よりも低下しており、とりわけ1年の秋学期で10ポイント減っていることが挙げられる。初年次教育において、学びへの内発的な動機づけを高め、学習意欲を持続させるような学習活動とはなにか、検討する余地があろう。

授業に対する評価では、約8割の学生が授業内容を有益で教員の説明をわかり易いとしている。教員の授業準備や熱意に対しても8割以上の学生が肯定的に感じ、その評価はおおむね良好である。学生の自己評価では、授業外での十分な自主学習と授業への積極的な取り組みとは必ずしも一致していない。予習、復習等が十分でなくとも授業には積極的に取り組んだと考える学生が少なからずいるからだ。質問をしたことがない学生が全体の4分の1近くいる事実と合わせて、授業と自律的学習との関係についての学生の意識を知るうえで、看過できないデータである。

「学ぶ」とは何か。「学ぶこと」を学ぶ認知的学習能力はどのように養われていくのか。教室外での自律的学習は、授業の理解度や授業への参加度、すなわち授業の「質」を大きく左右する。主体的能動的な取り組みの中から「問い」が生じ、さまざまな疑問から「知りたい」という欲求が生まれる。問題の所在が見えないところに知的好奇心や知的欲求はありえない。この自明の事がらをどのように気づかせ認識へと導くのか。学習者中心の視点から大いに議論すべき課題である。

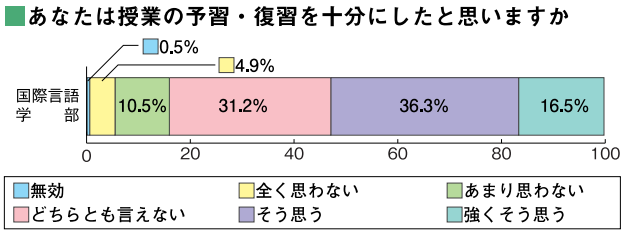
自律的な学習能力や学習態度・習慣は、大学という場を離れ未来へ向けての「生涯学習」を見据えた場合、その重要性は言うまでもなく、その育成こそ大学が担うべき役割ではないだろうか。学生の意識改革が求められると同時に、それを促す教員の資質が問われている。

分析を終えて
——自律的学習の実現へ向けて

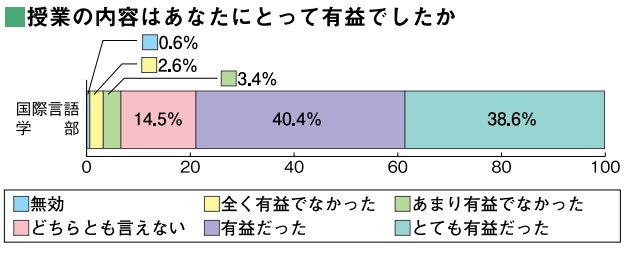
国際言語学部教務委員・准教授
池田 遊魚

穂谷学舎 国際言語学部
Hotani Campus

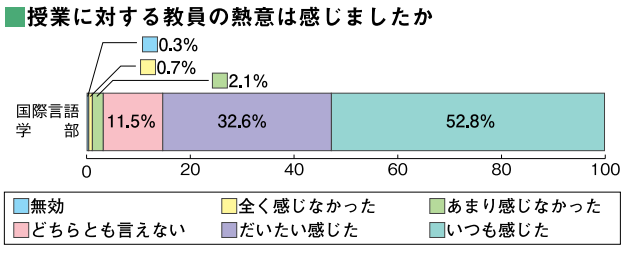
■あなたは授業の予習・復習を十分にしたと思いますか



■授業の内容はあなたにとって有益でしたか



■授業に対する教員の熱意は感じましたか



21年度決算 22年度予算 大学の収支内容を発表

決算は財政の健全性を十分に確保

大学は、平成21年度決算にかかる資金収支計算書、消費収支計算書、貸借対照表並びに平成22年度の資金収支予算書について別表のとおり発表した。21年度決算は監事及び公認会計士の監査を受け、評議員会の意見を聴き、理事会で決定したものである。21年度の本学の収容定員は、昨年と同様大学院88人、学部9050人、短大2200人、合計1万1338人であった。収入は、学納金収入の増加や運用利回りの上昇等による資産運用収入の増加があり、予算比増加となった。支出は、経費の増勢を経営努力でカバーしたことなどにより、予算比減少となった。この結果、財政の健全性を十分に確保した決算となった。

学納金は141億円 予算比上回る

1 21年度資金収支計算書の主要科目の説明

①学納金収入

21年度の学生実員は1万3294人と前年に比べて27人増員となり、全体の学納金収入は前年度に比べて約1億66万円増加の141億67百万円であった。

②手数料収入

21年度の手数料収入は4億3百万円で、前年度に比べて5百万円減少した。そのうち入学検定料収入は3億75百万円で、前年度に比べて4百万円の減少であった。

③補助金収入

本学に対する21年度私立大学等経常費補助金は一般補助と特別補助を合わせて6億74百万円であった。これに、現代的教育ニーズ取組支援プログラム［現代GP］や質の高い大学教育推進プログラム［教育GP］採択による大学改革推進等補助金51百万円、私学研修福祉会からの利子助成2百万円、私立大学等研究設備整備費補助金1百万円、政府開発援助外国人留学生修学援助費補助金1百万円等を加えた国庫補助金収入は7億30百万円となった。これは前年度に比べて57百万円の増加である。このほかに大阪府からの補助金1百万円があり、補助金収入の合計は7億31百万円となった。

独立監査人の監査報告書

平成22年5月27日

学校法人 関西外国語大学
理事長 殿

監査法人
指定社員 業務執行社員 公認会計士 [illegible]
指定社員 業務執行社員 公認会計士 [illegible]
指定社員 業務執行社員 公認会計士 [illegible]

当監査法人は、私立学校振興助成法第14条第3項の規定に基づく監査報告を行うため、昭和51年7月13日付文部省告示第133号に基づき、学校法人関西外国語大学の平成21年度（平成21年4月1日から平成22年3月31日まで）の計算書類、すなわち、資金収支計算書（人件費支出内訳表を含む。）、消費収支計算書及び貸借対照表（固定資産明細表、借入金明細表及び基本金明細表を含む。）について監査を行った。この計算書類の作成責任は理事者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から計算書類に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に計算書類に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積りの評価も含め全体としての計算書類の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の計算書類が、学校法人会計基準（昭和46年文部省令第18号）に準拠して、学校法人関西外国語大学の平成22年3月31日をもって終了する会計年度の経営の状況及び同日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示していると認める。

学校法人と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

21年度 補助金収入は7億3千万円 「国際化教育」の推進評価

特別補助の交付額は3億45百万円で、私立大学等経常費補助金に占める割合は51％。これは国際化教育を中心とした大学教育高度化推進、高度情報化推進及び国際交流の実績が認められたものであり、補助金をとりまく厳しい情勢の中で、本学の教育研究に対する整備拡充や適正な財務運営の実績が高く評価された結果である。

④資産運用収入

低金利時代が続いているが、運用資産の増加、金利の若干の上昇、運用方法の見直しにより、資産運用収入は全体で7億44百万円となり、前年度に比べて3百万円の増加となった。このうち関西外大学業継続緊急支援奨学金基金から23百万円の運用収入があり、奨学金として支給した。

⑤人件費支出

人件費支出は教職員組織の拡充等で

〈16面へ続く〉

■資金収支予算書

平成22年4月1日から平成23年3月31日まで （単位:円）

収入の部	
科目	予算
学生生徒等納付金収入	13,096,940,000
手数料収入	410,000,000
寄付金収入	3,200,000
補助金収入	661,000,000
資産運用収入	860,000,000
事業収入	5,000,000
雑収入	87,340,000
借入金等収入	0
前受金収入	6,885,380,000
その他の収入	1,066,585,999
資金収入調整勘定	△ 8,256,614,750
前年度繰越支払資金	13,411,680,346
収入の部合計	**28,230,511,595**

支出の部	
科目	予算
人件費支出	4,200,000,000
教育研究経費支出	3,334,000,000
管理経費支出	1,017,000,000
借入金等利息支出	2,850,000
借入金等返済支出	100,000,000
施設関係支出	1,820,000,000
設備関係支出	565,000,000
資産運用支出	7,500,000,000
その他の支出	339,907,810
予備費	300,000,000
資金支出調整勘定	△ 137,147,140
次年度繰越支払資金	9,188,900,925
支出の部合計	**28,230,511,595**

この資金収支予算書は、学校法人会計基準（昭和46年4月1日文部省令第18号）に従い作成したもので、補助金交付の観点からの表示区分になっています。

■資金収支計算書 平成21年4月1日から平成22年3月31日まで （単位:円）

収入の部			
科目	予算	決算	差異
学生生徒納付金収入	13,650,000,000	14,166,708,390	△ 516,708,390
手数料収入	410,000,000	402,858,441	7,141,559
寄付金収入	3,000,000	4,200,000	△ 1,200,000
補助金収入	601,000,000	731,354,024	△ 130,354,024
国庫補助金収入	600,000,000	730,088,000	△ 130,088,000
地方公共団体補助金収入	1,000,000	1,266,024	△ 266,024
その他補助金収入	0	0	0
資産運用収入	730,000,000	744,452,711	△ 14,452,711
資産売却収入	0	0	0
事業収入	5,000,000	5,887,000	△ 887,000
雑収入	105,000,000	142,702,959	△ 37,702,959
借入金等収入	0	0	0
前受金収入	7,300,000,000	8,223,614,750	△ 923,614,750
その他の収入	2,569,025,222	1,228,338,763	1,340,686,459
資金収入調整勘定	△ 8,422,551,850	△ 8,416,011,599	△ 6,540,251
前年度繰越支払資金	14,465,766,116	14,465,766,116	0
収入の部合計	**31,416,239,488**	**31,699,871,555**	**△ 283,632,067**

支出の部			
科目	予算	決算	差異
人件費支出	4,153,000,000	4,177,647,318	△ 24,647,318
教育研究経費支出	2,720,000,000	2,729,989,443	△ 9,989,443
管理経費支出	1,060,000,000	929,338,514	130,661,486
借入金等利息支出	4,750,000	4,750,000	0
借入金等返済支出	100,000,000	100,000,000	0
施設関係支出	2,070,000,000	918,972,054	1,151,027,946
設備関係支出	580,000,000	322,178,053	257,821,947
資産運用支出	8,500,000,000	8,509,000,000	△ 9,000,000
その他の支出	569,841,529	669,114,919	△ 99,273,390
予備費	200,000,000		200,000,000
資金支出調整勘定	△ 59,896,123	△ 72,799,092	12,902,969
次年度繰越支払資金	11,518,544,082	13,411,680,346	△ 1,893,136,264
支出の部合計	**31,416,239,488**	**31,699,871,555**	**△ 283,632,067**

この資金収支計算書は、学校法人会計基準（昭和46年4月1日文部省令第18号）に従い作成したもので、補助金交付の観点からの表示区分になっています。

中宮、穂谷両学舎学友会 22年度予算、21年度決算報告

中宮、穂谷両学舎の学友会の平成21年度決算報告、22年度の予算がまとまり、それぞれ4月と6月の教授会で承認された。概要は以下の通り。詳細はホームページ上の次のURLで公開している。

http://www.kansaigaidai.ac.jp/img/pdf/H22gakuyu_financial.pdf

■学友会平成21年度決算報告書 （単位:円）

中宮学舎			
	収入	支出	次年度繰越金
学生三団体	17,600,824	11,771,866	5,828,958
体育会	28,278,647	28,071,274	207,373
文化会	20,215,064	17,418,737	2,796,327
学生会	9,660,591	7,089,248	2,571,343
合計	75,755,126	64,351,125	11,404,001

穂谷学舎			
	収入	支出	次年度繰越金
体育会	16,800,302	10,435,173	6,365,129
文化会	9,188,195	4,958,345	4,229,850
学生会	8,394,306	4,306,063	4,088,243
合計	34,382,803	19,699,581	14,683,222

■学友会平成21年度予算 （単位:円）

中宮学舎	
	予算額
学生三団体	20,621,281
体育会	29,081,373
文化会	19,325,327
学生会	10,048,343
合計	79,076,324

穂谷学舎	
	予算額
体育会	14,864,785
文化会	8,264,286
学生会	7,234,151
合計	30,363,222

関西外大の最新ニュースはホームページにも掲載しています http://www.kansaigaidai.ac.jp/

Balance Sheet and Budget

「夢と希望」育てる環境づくりを推進

〈15面から続く〉

当初予算（41億53百万円）を超え、41億78百万円となった。わが国の景気動向、民間主要企業の給与実績、私学のおかれている立場等、いろいろな要因を十分検討し、社会的整合性の見地に立って、安定した給与水準の確保に努めた。

⑥教育研究経費支出

教育研究経費支出は27億30百万円であり、システム開発費や奨学費等の増加から、前年度に比べて2億59百万円の増加となった。

⑦施設・設備関係支出

中宮の国税局跡地とこれに隣接するコマツ所有地の取得を主因とした設備関係支出により、全体で12億41百万円となった。

学納金などの帰属収入約2億円増

2 21年度消費収支計算書の主要科目の説明

①帰属収入合計

学生納付金、手数料、寄付金（現物寄付金を含む）、補助金、資産運用収入、事業収入、雑収入の合計である21年度の帰属収入合計は、162億28百万円となり、前年度と比べて1億90百万円の増加となった。

②基本金組入額

21年度の基本金組入額は66億78百万円であった。内訳は1号基本金10億60百万円、中宮学舎の建物整備等のための2号基本金組入額16億18百万円、国際交流充実や特待生奨学等のための3号基本金組入額40億円である。

③消費収入合計

帰属収入合計から基本金組入額を差し引いた消費収入の合計は95億50百万円となり、前年度と比べて6億28百万円の減少となった。

④消費支出合計

人件費（退職給与引当金の繰入・取崩後）、教育研究経費（減価償却額を含む）、管理経費（減価償却額を含む）、借入金利息、資産処分差額（教育研究用機器備品等の除却額）の合計である消費支出合計は95億60百万円となり、前年度と比べて2億80百万円の増加となった。

⑤当年度消費収支差額

消費収入合計から消費支出合計を差し引いた当年度消費収支差額は10百万円の支出超過となった。

⑥翌年度繰越消費収入超過額

当年度消費支出超過額に前年度繰越消費収入超過額を加えた翌年度繰越消費収入超過額は22億63百万円となり、前年度と比べて10百万円の減少となった。

全体の固定資産71億8千万円増加

3 21年度貸借対照表の主要科目の説明

①固定資産

有形固定資産は、土地の購入と教育研究用機器備品等の充実による増加要因を上回る減価償却により784億21百万円となり、前年と比べて4億42百万円の減少となった。

その他の固定資産は第2号、第3号基本金や減価償却、退職給与引当特定資産の積上げにより753億71百万円となった。その結果、固定資産全体では1537億92百万円となり、前年度と比べて71億83百万円の増加となった。

②流動資産

主な流動資産である現金預金の減少により全体で135億57百万円となった。

③固定負債

約定返済に伴う長期借入金の減少と退職給与引当金の若干の増加により99億99百万円となった。

④流動負債

主な流動負債である前受金の減少により全体で86億64百万円となった。

⑤基本金

基本金の部合計は1554億23百万円となり、前年度に比べて66億78百万円の増加となった。本年度の基本金組入明細は前述の消費収支計算書の基本金組入額に記載のとおりである。

⑥消費収支差額

資産の部合計から負債の部合計と基本金の部合計を差引いた消費収支差額の部は22億63百万円の収入超過となった。

教育研究費は6億1千万円増やす

4 22年度資金収支予算書の主要科目の説明

①学納金収入

学納金収入については、現下の環境をふまえて、従来より厳しく見込み、入学者数を入学定員どおりとした。

入学金収入は前年度予算比1億73百万円減少の8億37百万円、授業料収入は前年度予算比2億49百万円減少の90億61百万円を計上し、学納金全体では前年度予算より5億53百万円減少の130億97百万円を計上した。

②手数料収入

入学検定料については前年度予算に比べて1百万円少ない3億81百万円としたが、手数料全体では前年度予算と同額の4億10百万円を計上した。

③補助金収入

前年度実績を踏まえたうえで、教育研究に対する一層の整備拡充や高度情報化推進を目指し、前年度予算比で60百万円多い6億61百万円を計上した。

④資産運用収入

運用資産が増加すること、きめ細かい運用に努力することにより前年度予算より1億30百万円多い8億60百万円を計上した。

⑤人件費支出

前年度当初予算に比べて47百万円増の42億円を計上した。

⑥教育研究経費

教育研究環境の整備や情報化の進展に対応し、充実を図るため引き続き努力する方針で、昨年度予算に比べて6億14百万円多い33億34百万円を計上した。

⑦施設・設備関係支出

中宮学舎土地取得・建築資金等の施設関係支出、教育研究用機器や図書充実の為の設備関係支出として、23億85百万円を計上した。

22年度学納金

約131億円を計上 経費削減に一段の努力

5 むすび

収入の確保と経費の節減対策が極めて重要な課題であり、特に全学的な経費節約に一段の努力が必要な時代に入ったといえる。本学は、いかに時代が変遷しようとも、学生の目線に立った「教育環境の整備・充実」を推進し、「学生の夢と希望を育てる大学づくり」に邁進していく方針である。

◇ ◇ ◇

平成17年4月1日より施行された改正私立学校法の趣旨に則り、平成21年度決算にかかわる財務情報をインターネットのホームページに掲載しますのでご覧ください。

（総務部）

■消費収支計算書 平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

（単位:円）

消費収入の部			
科目	予算	決算	差異
学生生徒納付金	13,650,000,000	14,166,708,390	△ 516,708,390
手数料	410,000,000	402,858,441	7,141,559
寄付金	33,000,000	33,643,275	△ 643,275
補助金	601,000,000	731,354,024	△ 130,354,024
国庫補助金	600,000,000	730,088,000	△ 130,088,000
地方公共団体補助金	1,000,000	1,266,024	△ 266,024
資産運用収入	730,000,000	744,452,711	△ 14,452,711
事業収入	5,000,000	5,887,000	△ 887,000
雑収入	105,000,000	143,437,574	△ 38,437,574
帰属収入合計	**15,534,000,000**	**16,228,341,415**	**△ 694,341,415**
基本金組入額合計	**△ 6,770,000,000**	**△ 6,678,419,147**	**△ 91,580,853**
消費収入の部合計	**8,764,000,000**	**9,549,922,268**	**△ 785,922,268**

消費支出の部			
科目	予算	決算	差異
人件費	4,158,000,000	4,181,098,275	△ 23,098,275
教育研究経費	4,070,000,000	4,083,319,252	△ 13,319,252
管理経費	1,393,000,000	1,267,987,899	125,012,101
借入金等利息	4,750,000	4,750,000	0
資産処分差額	41,000,000	23,143,913	17,856,087
予備費	(100,000,000) 0		0
消費支出の部合計	**9,666,750,000**	**9,560,299,339**	**106,450,661**
当年度消費支出超過額	**902,750,000**	**10,377,071**	
前年度繰越消費収入超過額	**2,273,296,228**	**2,273,296,228**	
翌年度繰越消費収入超過額	**1,370,546,228**	**2,262,919,157**	

予備費使用の金額及び振替科目

58,000,000	管理経費	広告費
23,000,000	管理経費	印刷費
19,000,000	管理経費	補助金返還金
計 100,000,000		

この消費収支計算書は、学校法人会計基準（昭和46年4月1日文部省令第18号）に従い作成したもので、補助金交付の観点からの表示区分になっています。

■貸借対照表 平成21年3月31日

（単位:円）

資産の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	**153,791,936,273**	**146,609,040,083**	**7,182,896,190**
有形固定資産	78,420,778,146	78,863,026,375	△ 442,248,229
土地	42,550,514,330	42,100,814,330	449,700,000
建物	27,983,639,959	29,026,133,986	△ 1,042,494,027
その他の有形固定資産	7,886,623,857	7,736,078,059	150,545,798
その他の固定資産	75,371,158,127	67,746,013,708	7,625,144,419
流動資産	**13,557,413,485**	**14,544,687,461**	**△ 987,273,976**
現金預金	13,411,680,346	14,465,766,116	△ 1,054,085,770
その他の流動資産	145,733,139	78,921,345	66,811,794
資産の部合計	**167,349,349,758**	**161,153,727,544**	**6,195,622,214**

負債の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定負債	**999,491,227**	**1,096,040,270**	**△ 96,549,043**
長期借入金	100,000,000	200,000,000	△ 100,000,000
その他の固定負債	899,491,227	896,040,270	3,450,957
流動負債	**8,663,522,560**	**9,039,393,379**	**△ 375,870,819**
短期借入金	100,000,000	100,000,000	0
その他の流動負債	8,563,522,560	8,939,393,379	△ 375,870,819
負債の部合計	**9,663,013,787**	**10,135,433,649**	**△ 472,419,862**

基本金の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
第1号基本金	97,255,416,814	96,194,997,667	1,060,419,147
第2号基本金	38,618,000,000	37,000,000,000	1,618,000,000
第3号基本金	19,000,000,000	15,000,000,000	4,000,000,000
第4号基本金	550,000,000	550,000,000	0
基本金の部合計	**155,423,416,814**	**148,744,997,667**	**6,678,419,147**

消費収支差額の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
翌年度繰越消費収入超過額	2,262,919,157	2,273,296,228	△ 10,377,071
消費収支差額の部合計	**2,262,919,157**	**2,273,296,228**	**△ 10,377,071**

科目	本年度末	前年度末	増減
負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計	**167,349,349,758**	**161,153,727,544**	**6,195,622,214**

この貸借対照表は、学校法人会計基準（昭和46年4月1日文部省令第18号）に従い作成したもので、補助金交付の観点からの表示区分になっています。